

〔研究論文〕

デリー・スルターン朝とその遺跡群 —イブン・バットゥータを中心にめぐる諸王朝の物語—

宮原 辰夫

〔Article〕

Delhi Sultan Dynasty and Its Ruins

Tatsuo MIYAHARA

Abstract

This paper will examine the narrativeness of the Delhi sultan dynasty and its sites using books, such as Ibn Battuta (Arab traveler, 1303-68/9) and Ferishta (Persian chronicler, 1560-1620). Why do I think of narrativeness as important? However famous it may be as an historical site, the other than specialists in certain types of archaeology and architecture, I find it really difficult to put feeling into the site in more depth than explanatory writing. Therefore, this paper aims at deepening concern and understanding in the general public for the Delhi sultan dynasty and its site through narratives.

はじめに

デリーの中心地、コンノート・プレイスから南に30kmほど車で走ること約50分、オーロビンド・マルグ(Aurobindo Marg, 旧メヘローリ・ロード)の最終点に差し掛かると、車窓からひときわ目を引く巨大な塔が現れる。それがクトゥブ・ミナールである。近くで見ると、イスラーム世界でよく目にするミナレット(尖塔)とはかなり姿形が異なっている。いやむしろ似て非なるものと言ってよい。天に高く聳えるクトゥブ・ミナールは見る者を圧倒するだけでなく、畏怖の念さえ起こさせるのに十分な威容を誇っている。

クトゥブ・ミナールは1200年頃、デリー・スルターン朝の最初の王朝である奴隷王朝のスルターンが、クトゥブ・モスク(クワットゥル・イスラム・マスジット)に付属して創建したものである。クトゥブ・ミナールは基底部分が直径14.3m、高さが72.5m、インドで最大最古のものであり、世界で最も高いミナレットである。イスラーム王朝による最初のインド支配はまさにこのクトゥブ・ミナールの創建から始まると言っても過言ではない。

本論文は、デリー・スルターン朝とその遺跡群との物語性(関連性)についてアラブ人大旅行家イブン・バットゥータ(Ibn Battuta, 1303-68/9)やペルシア人編年史家フィリシュタ(Ferishta, 1560-1620)などの書物を手掛かりにして検証することである。なぜ物語性を重視するのか。それはいかに有名な歴史的な建造物であっても、一部の考古学や建築学などの専門家を除いて、一般の見物人にとって説明書き以上に建造物に感情を移入するのはきわめて困難であるからだ。したがって、本論文の目的は、デリー・スルターン朝とその遺跡群に関する理解を深めるために、デリー・スルターン朝

をめぐる物語とその遺跡との関連性を明らかにすることである。

デリー・スルターン朝(The Sultans of Delhi, 1206-1526)とは、北インド一帯を支配したイスラーム諸王朝を指す。デリーに都を置き、ムスリムのスルターン(君主)が支配したことから、この名称で呼ばれ、インド史の上ではデリー・サルタナット(Delhi Sultanate)と呼ばれることも多い。またデリー諸王朝とも呼ばれる。歴史的には、奴隷王朝(Slave dynasty, 1206-90)、ハルジー朝(Khalji dynasty, 1290-1320)、トゥグルク朝(Tughluq dynasty, 1320-1413)、サイイド朝(Saiyid dynasty, 1414-51)、ローディー朝(Lōdī dynasty, 1451-1526)までの5王朝の320年間を指す。ただし、本論文では、紙数上の問題と物語の設定上の問題から、サイイド朝とローディー朝は除くことにした。

1. イスラーム侵入の始まり

インド北部は幸運なことに、外国勢力による本格的な侵入を長い間受けていなかった。しかし、10世紀後半頃、アフガニスタンにトルコ系イスラーム王朝のガズナ朝(Ghazna, 977-1186)が興り、10世紀末にマフムード(Mahmūd, 在位998-1030)がスルターンに即位すると、巧みな政略・軍略によって支配領域を拡大し、その版図はイラン中央部からホラズム、パンジャーブまで達した。11世紀に入ると、マフムードは正統イスラームの擁護者の名の下に、インド北部へ本格的な侵攻を開始し、1025年までの約25年の間、パンジャーブから北インド、中央インドさらには西海岸まで十数回に及ぶ遠征を行った。マフムードによって襲撃された主要なヒンドゥー寺院や都市は破壊され、多くの富が略奪された。とくに1024年から1025年にかけて、グジャラート地方の有名なヒンドゥー寺院ソームナートが襲撃された際、本殿や偶像は徹底的に破壊され、宝物庫や偶像の中に隠された数々の財宝は略奪された。バラモンを含む多数の信者もまた殺戮され、捕虜となりガズナに連れ去られ奴隷となった。その時に持ち帰ったのは、財宝や捕虜だけでなかった。本殿の中央に鎮座していた石の偶像もまた鼻の部分は削り取られ解体されてガズナに運ばれた。一部は集会モスクの門前に、もう一部はマスムードの宮殿の門前に置かれた。さらに偶像の破片は、メッカとメディナに送られるために保管されたと言われる。⁽¹⁾「ソームナートの悲劇」とも言えるこの出来事は、ヒンドゥー教徒に大きな衝撃を与えた。こうしたマフムードの残虐で野蛮な侵略行為は長い間、北インドの人々にイスラームに対する恐怖と不信感を植付ける結果となった。

マフムードのインド侵攻の目的は、インド北部にイスラーム王朝(ムスリム政権)を打ち立てることではなく、あくまでも偶像を破壊し、イスラームの擁護者としての名声を得ることであったのかもしれない。略奪した「インドの富」は、自己の覇権確立と学問・文芸の保護に使用された。マフムードのインド遠征の勝利が近隣のイスラーム諸王朝に広く伝播すると、驚きと称賛を持って受け入れられ、のちにイスラーム教徒による北インド支配への道を開くことになる。しかし、北インドにイスラーム王朝が樹立するのはまだ先のことである。

1030年マフムードが亡くなると、ガズナ朝は次第に弱体化し、それに乗じて独立したゴール朝(Ghōr, 1000頃-1215)が急速に勢力を拡大した。1173年スルターン・ギヤースッディーン・ムハンマド(Ghiyāth al-Dīn Muḥammad, 在位1163-1202)はガズナを占領すると、領土の拡大に乗り出した。スルターン・ギヤースッディーンはガズナの支配を弟のムイズッディーン・ムハンマド(Mu'izz al-Dīn Muḥammad, 在位1203-06)に委ね、パンジャーブ(ラホール)に残るガズナ勢力の征服と北インドへの侵攻を任せると、ホラズム王国の脅威に備えるために本拠地のゴール(アフガニスタンの西)に

帰還した。⁽²⁾ガズナ朝のマフムード以後、トルコ系諸族による西北インドへの侵入は、「ゴールのムハンマド」と呼ばれたゴール朝のムイズブディーン・ムハンマド(シハーブッディーン・ムハンマド)によって開始されることになる。

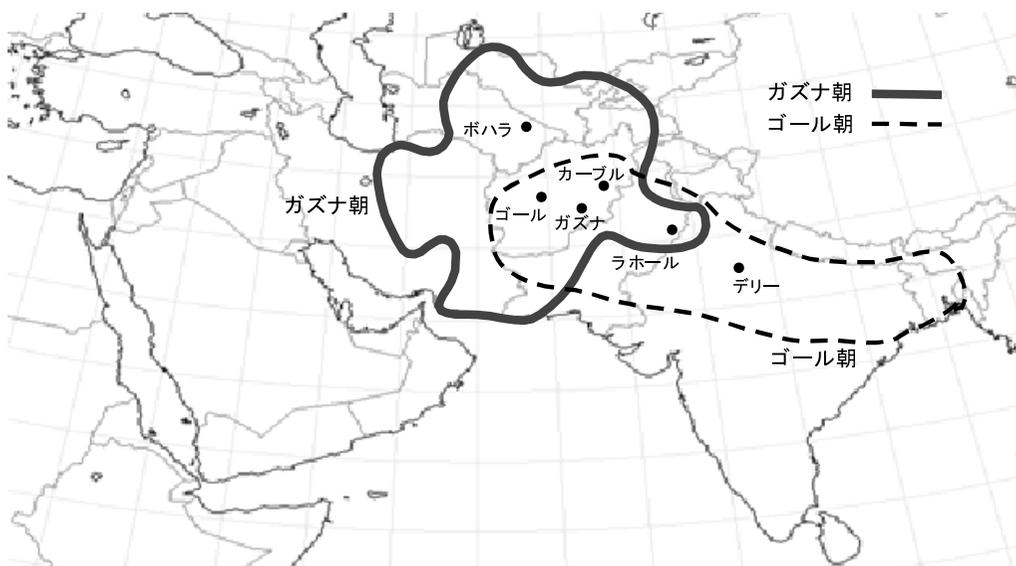


図1 ガズナ朝の最大支配領域(1030年頃)
ゴール朝の最大支配領域(12世紀末)

ゴールのムハンマドは、1170年代後半以後しばしばインドへの侵入を繰り返していた。1186年、パンジャブのラホールを拠点にしていたガズナ朝を滅ぼすと、北インドへの侵攻を本格的に開始した。ラージプートのチャーハマーナ(チャウハーン)朝の王プリトゥヴィラージ3世(Prthvīrāja III, 在位1177-1192)に阻まれながらも、2度にわたりタラーインの地での交戦の末、ついに1192年プリトゥヴィラージ3世率いるラージプート連合軍を撃破した。翌1193年、ムハンマドの宮廷奴隷(マムルーク)出身の武将、クトゥブッディーン・アイバク(Qutb al-Dīn Aibak, 在位1206-10)はチャーハマーナ朝の拠点であったデリーを陥落させると、征服地デリーの統治責任者としてプリトゥヴィラージ3世が築いたラーイ・ピタウラー城砦に自らの拠点を置いた。⁽³⁾タラーインの戦いで敗れたプリトゥヴィラージ3世は捕えられ、のちに処刑されるが、プリトゥヴィラージ3世は今日もなお歴史上有名な英雄として多くのヒンドゥー教徒に広く崇敬されている。



図2 プリトゥヴィラージ3世の銅像(ラーイ・ピタウラー城砦公園内)

アイバクはゴールのムハンマドの後継者と目されていたが、1206年にムハンマドがガズナへの帰還途中、インダス川の河畔で暗殺されると、領土支配と後継者をめぐる争いがゴール朝内で激化した。これを機に、アイバクはゴール朝から独立して新しい王朝を創始したのである。この王朝は、アイバクをはじめとして、初期のスルターン(君主)が宮廷奴隷出身であったことから「奴隷王朝」と呼ばれるようになった。インドではじめてムスリム政権を樹立した奴隷王朝は、その後インド亜大陸に次第にイスラームの影響を強めていくことになる。

2. デリー・スルターン朝

(1) クトゥブ・モスク—土着文化の破壊と継承

ゴール朝の遠征軍を率いた武将アイバクは1193年にデリーを占拠すると、そこにインド支配の拠点を置き、そして直ちにモスクの建設に着手した。さらに1200年には、モスクの南東部にクトゥブ・ミナールの建設を開始した。以後1世紀あまりの間に2回に及ぶ拡張工事が行われた。その結果、「クワットウル・イスラーム(イスラームの力)・マスジッド」の名で知られたインド最古の大モスク、通称「クトゥブ・モスク」(1193 - 98)が完成し、「クトゥブ・ミナール」とともに、「クトゥブ遺跡群(Qutb complex)」として1993年に世界遺産に登録されている。

図3を参考にして、デリーの大モスクが拡張されるプロセスを順に追うと次のようになる。第1次拡張工事は、3代スルターン・イルトゥトミシュによって行われ、①最初のモスクと④クトゥブ・ミナールを完成させて回廊内に取込み、北西部に自身の墓を建立し、原初の約3倍の広さに拡張された。第2次拡張工事は、ハルジー朝のスルターン・アラーウッディーンによって行われ、南部のアラーイー門と未完のミナールを囲む回廊部、そして南西部には自身の墓とマドラサを建立し、第1次拡張部分を含む原初の約11倍にまで拡張された。⁽⁴⁾

ヒンドゥー王を偲んでヴィシュヌ神に捧げるという刻銘が今も残っている。⁽⁷⁾むしろ疑問なのは、明らかに異教徒の記念塔と知りながら、それをわざわざ大モスクの中央部になぜ据えたのかということである。これは想像の域を出ないが、その理由を想起させる興味深い記述がある。歴史家のロミラターバルは『インド史』の中で、トゥグルク朝のフィーローズ・シャーが宮廷建造物の中央に大きな石柱を移設した経緯を説明している。

「トゥグルク朝のフィーローズ・シャーはインドの過去の歴史や文化に対して多大な興味を持っていた。あるとき、メーラトとトープラーでアショーカ王柱を見てすっかり魅せられ、それらをデリーに運ばせた。その1本をよく目につく城砦の屋上に建てた。その銘文に何が書いてあるか知りたがっていたが、アショーカ王の時代以後に文字が変わってしまい、誰も読むことができなかった。彼はそれが呪文であり、宗教儀礼に関係あるものと考えていた。」⁽⁸⁾



図5 中央部に「鉄柱」(Iron Pillar)
背後には大モスクの礼拝室



図6 フィーローズ・シャーの宮廷建造物
上部にアショカ王石柱

おそらくアイバクもまた、フィーローズ・シャー同様、古代インドの「鉄柱」(記念塔)に強い関心を抱き、魅了されたのであろう。そうでなければ、わざわざ大モスクの中央部にそれを移設したりはしないはずである。フィーローズ・シャーの宮廷建造物(図6)の上に聳える石柱は、建造物の上に付設されているというよりもむしろ石柱を中心にしてそれを支える形でこの建造物は造られているように見える。むろん、この石柱にもその頂上にはもともと牛か、獅子か、象などの動物像があったと思われるが、偶像を禁止するイスラームにより削り取られたと解釈すべきだと思う。今でもニューデリー東部地区の遺跡公園「フィーローズ・シャー・コートラ」の中にそれは残っている。

●「偶像の家」の破壊と再生

クトゥブ・モスクが建てられた場所は、もともとプリトゥヴィラージ3世が築いたラーイ・ピタウラー城砦内であった。そのため、その内庭には当時27のヒンドゥー教やジャイナ教の寺院(神殿)が立ち並んでいたと言われる。この「偶像の家」をアイバクは象を用いて解体し、クトゥブ・モスクの建設に必要な石材は再活用し、偶像などは破壊し、土の中に埋めたとされる。現在でも、石材が再活用された痕跡を最初のモスクの回廊部(図7)に見ることができる。勿論、イスラームでは偶像崇拜が禁じられているので、装飾的な柱の偶像は鼻の部分だけが削り取られている。イブ

ン・バットゥータは「偶像の家」について次のように記述している。

「またモスクの諸門のうちの東門には、実に巨大な二つの青銅製の偶像があって、地面に伏せた姿で石に固定されている。モスクに入る人も出て来る人も、皆がその二つの偶像の上を踏みつけていく[のが習わしである]。このモスクの場所は、もともとはブドハーナ、つまり偶像の家(仏堂)であったが、[デリーの町が]征服された時に、モスクに変えられた。」⁽⁹⁾



図7 大モスクを囲む東回廊の柱列



図8 モスクの礼拝室に通じる東門

巨大な二つの青銅製の偶像が埋められていたというモスクの東門の入口を探してみた。本来、モスクには西門はない。なぜなら西は聖地メッカの方角であり、その方角側にミフラブという窪みのある壁が設けられているからである。ムスリムはモスク内では、メッカの方向を示すミフラブに向かってお祈りをするのである。ところがクトゥブ・モスクには、西側の壁はすでに消失しているために一般の人には分かりにくい、「鉄柱」のすぐ前に、二本の柱でアーチを支える大きな門がかろうじて残っている、その方向が西に当たる。したがって、その反対側がモスクの東門(図8)に当たる。その入口に青銅製の偶像が地面に伏せた姿で石に固定され、その上をムスリムが出入りしていたと考えると複雑な思いに駆られる。こうした集会モスクの門前に偶像を固定してその上を踏みつけて出入りするという習わしは、ガズナ朝のマフムードにも見られるものである。ヒンドゥー教徒にとっては、それは耐え難い屈辱であったに違いない。

ヒンドゥー教やジャイナ教の寺院(神殿)や偶像を破壊し、その石材を再利用して建てられたモスクは、デリーだけではない。アジメールにも存在する。奴隸王朝のスルターン・アイバクは、ヒンドゥー・ラージプート諸王権の重要な要衝の地アジメールを支配下に置くと、ヒンドゥーの圧倒的多数を占めるインドの環境の中で、ムスリム支配の影響力を高めるために、ヒンドゥー寺院を壊して大モスクを建設した。それがアルハーイ・ディン・カ・ジョンプラー・マスジット(Arhāi Dīn ka Jhonpurā Masjid, 「二日半で造られたモスク」の意味)(図9・10)である。イスラーム神秘主義のチシュティ教団を確立したムーヌッディーン・チシュティ(Mu'īn al-Dīn Chishtī, 1142?-1236)は、かなりの期間、わずかの弟子と一緒にこのモスクに住んでいたと言われる。彼らにとって、このモスクは砂漠(多数のヒンドゥー)の中のオアシスであったに違いない。⁽¹⁰⁾



図9 アルハーイー・ディン・カ・ジョンプラー
・マシッド、アジメール

図10 アルハーイー・ディン・カ・ジョンプラー
・マシッドの回廊の柱列

●クトゥブ・ミナール

クトゥブ・モスクの南東には、インド最大・最古のクトゥブ・ミナール(図11)が建っている。高さ72.5m、頂上まで379段の階段がある、ミナレットとしては世界一の高さを誇る。クトゥブ・ミナールは当初4層構造であった。1層の部分はアイバクによって建てられ、2層から4層部分はイルトゥトミシュによって建てられた。ところが、1369年に雷によって4層部分が激しく損傷したため、時のスルターン・フィローズ・トゥグルクによって大修復工事が行われ、その時に5層部分が付け加えられ、現在の姿に至っている。⁽¹¹⁾その後も幾度となく修復工事が行われている。イブン・バットゥータもこの巨大な塔を見てさぞ驚いたことであろう。クトゥブ・ミナールの印象について、彼は次のように記述している。

「モスクの北側の広場には、イスラーム諸国では他に類を見ない一つのミナレットがある。それは、モスクの他のすべての部分の石とは違って、赤色の色で建てたものである。なぜならば、一般にミナレットは、[すべて]白い[石から出来ている]からである。しかも、そのミナレットの石には、文字が彫り込まれている。それは、天を突くように聳え、ミナレットの塔頂[に載せた装飾物、相輪]は白亜に輝く大理石で造られ、そのリング状の球体部(宝珠)は、純金製である。その通路の幅は、象がそこを登って行けるほどの幅である。信頼出来る人が私に語ったところによると、それが建設された当時、象が石を運んでその天辺に登って行くのを、その人は実際に見たという。」⁽¹²⁾

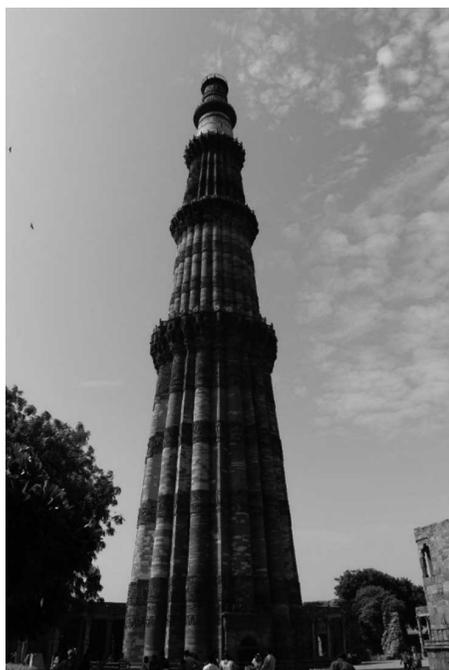


図11 クトゥブ・ミナール

図12 クトゥブ・ミナールの壁面
コーランの章句が刻まれている

クトゥブ・ミナールのモデルとなった塔は存在していたのであろうか。クトゥブ・ミナールのモデルされるのは、ゴール朝のギヤースッディーン・ムハンマドが建造した「ジャームの塔」(1193/4)であると言われる。アフガニスタンのゴール州の人里離れた谷に、高さ60mの円塔が独立して建てられているミナレットを見ると、そもそも「ジャームの塔」は最初から何かの記念塔と考えるのが自然な気がする。ゴール朝の「ジャームの塔」もまた、ガズナ朝のスルターン・マスウード3世が1100年頃に建てたミナレットをモデルにしたと言われ、他の建築物に付随しておらず、記念塔として建設されたものと推測されている。ガズナ朝の始まるこのような独立したミナレットは、カラハン朝、ゴール朝などでも模倣され、奴隷王朝のクトゥブ・ミナールへと継承されたと考えられる。⁽¹³⁾



図13 ガズナ朝マフムード3世の
ミナレット(1100年頃建立)
Wikipediaより写真転載



図14 ゴール朝のジャームのミナレット
(1194年建立)Wikipediaより写真転載

ただクトップ・ミナールはモスクなどの建築物に付随しており、その意味ではガズナ朝やゴール朝のミナレットとは異なる。しかし、本来ミナレットとは、この尖塔の上からムアズィン(礼拝の呼びかけをする者)が信徒への礼拝の呼びかけ(アザーン)を行う建造物であることを考えれば、このミナレットはあまりにも巨大すぎる。その宗教的機能を十分果たしていたかどうかは疑問である。もちろん、クトップ・ミナールも一種のミナレットではあるが、むしろミナレットのもつ本来の宗教的機能よりも、異教徒に対するムスリムの勝利を示威し、多数派の土着ヒンドゥー教徒に対するムスリムの政治的・文化的優位性を強調する狙いがあったのではないと思われる。アライー・ミナールについては、スルターン・アラウッディーンのところで触れることにする。

3. デリー・スルターン朝とその物語

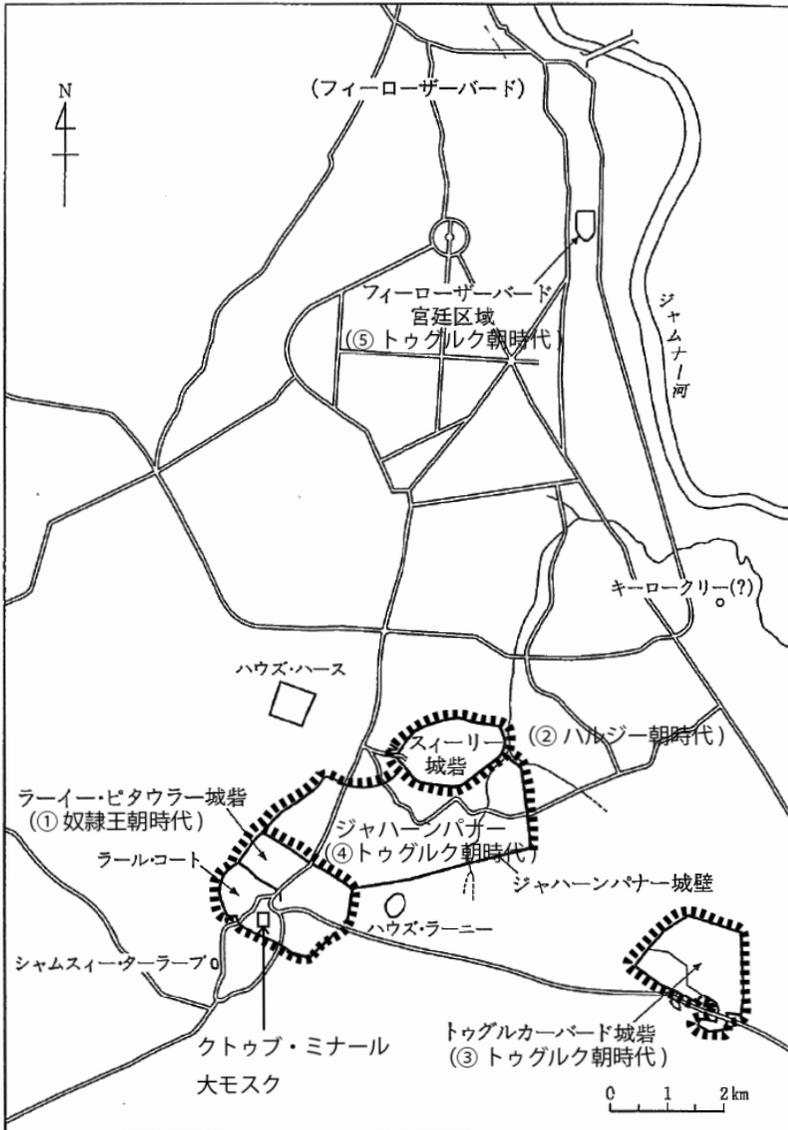


図15 デリー・スルターン朝の諸城砦

(1) 奴隷王朝：スルターン・アイバクとスルターン・イルトゥトミシュ

それにしても、たとえムスリムの勝利を示威する「記念の塔」とはいえ、なぜこれほどの巨大な塔、クトubb・ミナルを造る必要があったのであろうか。少年の頃に奴隷となったアイバクとイルトゥトミシュの数奇な運命と無関係ではない気がする。アイバク (Qutb al-Dīn Aibak, 在位 1206-10) はトルキスタンのトルコ人の両親のもとから誘拐されて奴隷となり、イランのニシャープルの

名家に買われ、そこで天賦の才を見いだされ、ペルシア語やアラビア語、科学などを学ぶ機会が与えられたが、パトロン死によって転売されて「ゴールのムハンマド」の奴隷となった。⁽¹⁴⁾

一方、3代目のスルターン・イルトゥトミシュ(Shams al-Din Ilututmish, 在位1211-36)はトルコ人イルバリー族の名家の出であったが、少年のころ父親にとりわけ可愛がられていたがゆえに他の兄弟に妬まれ、狩りに出かけたときに裸にされ、奴隷として隊商の団に売られ、転売された末アイバクによって購入された。⁽¹⁵⁾ある意味では、奴隷出身の2人にとって、クトゥブ・ミナールは、奴隷から身を起こしスルターンとなった、その金字塔とも言えるものであったのかもしれない。

アイバクが亡くなると、彼の副官で、娘婿であった元奴隷出身のシャムスッディーン・イルトゥトミシュ(イレトゥミシュともいう)が第3代のスルターンとなった。デリーに統治権を実質的に確立させ、奴隷王朝の基礎を築いたのは、スルターン・イルトゥトミシュであったと言っても過言ではない。なぜなら、デリーに奴隷王朝を創始したアイバクは、北の脅威ホラズム王国のインド侵攻を防ぐためにデリーよりもアフガニスタンに近いパンジャーブのラホールに拠点を移し、ポロ競技中に落馬死するまでの短い統治の4年間をラホールで過ごしたからである。

イルトゥトミシュの人物評について、イブン・バットゥータは「彼の治世は、20年間であり、[統治において]公正な人、善行に勤しむ信徒、そして卓越した人物でもあった」「彼の残した賞賛すべき行動としては、彼は神の道を逸脱した不正行為に対して厳しき立ち向かい、一方、[不当な仕打ちを受けて]犯罪者[と見做された人]たちが公平に裁かれることに努力したことである」と書き残している。⁽¹⁶⁾当時、一般のインド人は白い衣服を着ていたのだから、イルトゥトミシュは不当な扱いを受けた者はどこにいても分かるように色染の衣服を着るよう政令を発した。イルトゥトミシュの死後もその政令は一時習慣として残っていたようである。イルトゥトミシュの墓(図16)は、大モスクの西に接して建てられている。この墓に地下通路(図17)があるのは、本当の棺が地下にある二重墳墓の形式をとっているからである。これは中央アジアのトルコ系・モンゴル系諸族の習慣であったようだ。したがって、我々が目にする棺は模棺(セノターフ)である。トゥグルク朝のギヤースッディーンの墓やムガル帝国のフマユーン廟やタージ・マハルなどの墓にもこの習慣は継承されている。

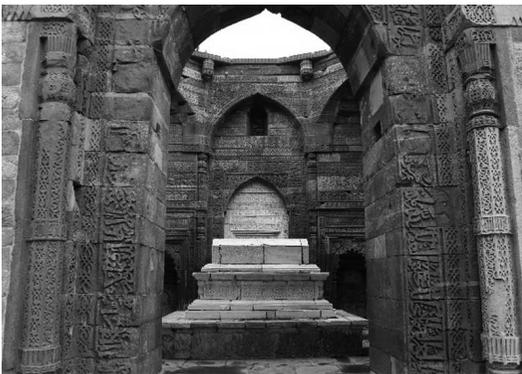


図16 イルトウトミシュの墓



図17 本棺に通じる地下通路

イルトゥトミシュは我が子に対しても公平であったようである。彼には3人の息子と1人の娘がいた。イルトゥトミシュは長男を亡くすと、自分の後継者として、次男のルクヌッディーンではな

く娘のラズィヤを指名した。怠惰で放蕩に耽る息子ルクヌッディーンよりも娘のラズィヤの方が国政の運営能力に長けていたからである。⁽¹⁷⁾だが、イルトゥトミシュが亡くなると、父の意向に逆らい、その後継者になったのはルクヌッディーンであった。ルクヌッディーンはスルターンの座に就くと、放蕩と無能さにゆえに権力を濫用し、国政を顧みなかった。

ルクヌッディーンの代わりに王朝を実質的に支配していたのは、イルトゥトミシュの正妃で、ルクヌッディーン之母のシャー・トゥルカーンであった。彼女は元々トルコ人奴隷で、嫉妬深く、冷酷で残忍な性格の人物であったようだ。ルクヌッディーンと母のシャー・トゥルカーンは共謀し、宮廷の粛清に乗り出すと、後宮(ハーレム)にいたイルトゥトミシュの女たちを片端から投獄・処刑し、ルクヌッディーンの下弟(異母弟)クトゥブッディーンを盲目にしたうえで殺害した。⁽¹⁸⁾クトゥブッディーン姉であるラズィヤは、そうした弟への不当な暴力と殺害という違法行為を認めなかったため、ルクヌッディーンたちはラズィヤの殺害を計画した。その計画に気付いたラズィヤが取った行動について、イブン・バトゥータは次のように記述している。

「ある日の金曜日大モスクに隣接した〈ダウト・ハーナ〉と呼ばれる古い宮殿の屋根に登った。その時、彼女は、犯罪者たちの[着色染めの]衣服を纏っていた。彼女は人々の前に姿を現して、屋根の一番の上から呼び掛けながら、『私の兄は弟を殺し、その上、私まで殺そうとしています』と彼らに言った。(中略)すると大騒ぎになり、モスクの中にいたスルタン＝ルクヌッディーンのところへ殺到して行った。彼らは彼をつかまえると、彼女の前に連れ出した。そうすると、彼女は皆に向かって、『殺人者は殺されるべきです!』と言った。そこで彼らは、彼女の弟の報復として彼を殺した。」⁽¹⁹⁾

この話が事実であるかどうかは分からないが、金曜日大モスクに接した〈ダウト・ハーナ〉と呼ばれる古い宮殿があったようである。大モスクとはクトゥブ・モスクのことであろうが、しかし大モスクに隣接した宮殿を探すことはできなかった。いずれにせよ、ルクヌッディーンは次第に支持を失い、インド北部全域で貴族の反乱を招く結果となった。最後には、ルクヌッディーンと母のシャー・トゥルカーンはラズィヤの一部の廷臣・貴族たちによって捕えられ、処刑された。ルクヌッディーン治世はわずか7か月で終わった。

②スルターン・ラズィヤの悲劇

ルクヌッディーンが処刑されたあと、スルターンの座に就いたのは、イルトゥトミシュの娘ラズィヤ(Raziyah, 在位1236-40)であった。女性のスルターン即位はインド史上では珍しいことであった。それだけに、女性がスルターン位に居続けることがいかに難しいことであったか、そのことをイブン・バトゥータの旅行記からも伺い知ることができる。

「彼女は4年間にわたって王権を維持した。その間、彼女はいつも男たちと同じように、弓、矢筒(ティルカシュ)や小型の服(キルバーン)を持って馬に跨り、顔には覆い布さえ被らなかつた。その後、彼女の所有するエチオピア人との仲が疑われたため、人々は彼女を廃位させて、結婚させることで一致した。その結果、彼女は廃位させられ、彼女の親戚の一人と結婚した。そして、彼女の弟ナーシル・ウッディーンが王位に就いた。」⁽²⁰⁾

スルターン・ラズィヤは有能で自尊心が強く男勝りであったがゆえに、朝廷の高官・貴族から妬みや反発を買い、わずか4年で廃位させられるという無念な結末に終わった。そのことが後に玉座奪還に燃え反乱を企てることになる。この企ても結局失敗に終わった。イブン・バトゥータはその反乱の顛末について、次のように記述している。

「反乱に失敗し、ラズィヤの軍は敗走させられ、彼女自身も逃げたが、空腹に襲われ、すっかり疲れ果てた。そこで、彼女は一人の農夫のところに近づき、土地を耕しているのを見て、何か食べ物を恵んでくれるよう求めた。農夫は、彼女に一切れのパンを差し出したので、彼女はそのパンを食べた。彼女は睡魔に襲われた。その時の彼女は、男の服装をしていたが、彼女が眠った時、その農夫は寝ている彼女の姿を覗くと、彼女が衣服の下に宝石飾りの付いた[婦人用の]短い外衣(カパーウ)を纏っているのを見た。そこで農夫はそれが女であることを知って、彼女を殺すと、着ているものを剥ぎ取り、彼女の馬を追いかけて捕らえ、殺した遺体を彼の畑に埋めた。農夫は彼女の衣服の一部を手にとると、それを売りに市場に行った。しかし、市場の商人たちは彼の様子を不審に思い、彼をシフナ、つまり警察長官(ハーキム)に引き渡した。長官は、彼を鞭で打って、彼女を殺したことを白状させた。そして、彼は彼らを彼女を埋めた場所に案内した。彼らは、彼女を掘り出して浄めた後、経帷子(きょうかたびら、埋葬用白布)に包んで、その所に埋葬した、その場所には円蓋堂が建てられて、彼女の墓は現在もなお、御利益を得るための参拝の場所となっている。そこは[デリー]町から一ファルサワの距離にある(ジューン川(ヤムナー川))と呼ばれる大河の岸辺にある。」⁽²¹⁾

イブン・バトゥータのラズィヤについての説明はいささか芝居がかった感じもするが、ラズィヤの男勝りの大胆な行動が衆目を集め、男優位のムスリム社会に様々なスキャンダルを巻き起こしたことは想像に難くない。ペルシア人編年史家フィリシュタはラズィヤについての記述を残しているが、それを要約すると以下のようなものである。

「最眞にしていたアビシニアン人(エチオピア人)奴隷のヤクートを馬管理の長官に任命したことから、トルコ系貴族の地方総督たちの間に不平不満の感情が高まり、ついに反乱にまで発展した。その首謀者がバーティンダの地方総督アルトゥーニヤであった。ラズィヤはその反乱の鎮圧に向かう途中、ラズィヤ軍の内部クーデターに遭い、激しい衝突が起こり、その時にヤクートは殺され、ラズィヤ自身も捕えられた。彼女はバーティンダ城のアルトゥーニヤの元に押送された。ラズィヤが廃位させられると、彼女の弟のムイズッディーン・バフラーム(在位1240-42)がスルターン位を継いだ。その間、アルトゥーニヤは幽閉されていたラズィヤを解放し、妻に迎えると、彼女の助言を得て、短期間で大軍を集めると、デリーに向かって進軍した。しかし、スルターン・バフラームの命を受けた、バルバン(後にスルターンとなる)によって撃破され、この敗走中に、ラズィヤと夫のアルトゥーニヤはザミンダール(ヒンドゥー領主層)によって捕えられ、殺害された。2人は捕えられてバフラームの元に押送されたが、バフラームは投獄して暗殺せよと命じたと語る歴史家もいる。」⁽²²⁾

ラズィヤがどのような最後を迎えたか、その真実は藪の中であるが、もしラズィヤが公けの場に出るときには顔をヴェールで覆い、大胆な行動を控え、トルコ系奴隷を優遇し、王朝の高官や廷

臣、地方総督に対して十分な配慮を心がけていたら、反乱も起こらず悲劇的な結末を迎えずに済んだのであろうか。スルターン・イルトゥトミシュやアラーウッディーンの墓とされる遺跡がクトゥブ・モスクの裏手にあるのに比べて、スルターン・ラズィヤの墓(図19)はクトゥブ地区からずっと離れたオールド・デリーの南部、現在のトルクマーン門(Turkman Gate) (図18)の近くに、訪れる人もなく、ひっそりと埋葬されている。

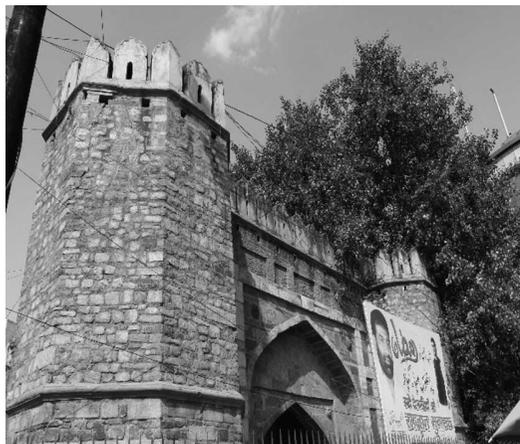


図18 トルクマーン門の正面



図19 ラズィヤの墓

③ギヤースッディーン・バルバン(在位1266-87年)

ラズィヤの後、スルターンとなった2人の王の治世はどちらも短命に終わった。第8代スルターンとなったのは、ラズィヤの弟で、イルトゥトミシュの3番目の息子ナースィルッディーン(Nasir al-Dīn Maḥmūd, 在位1246-66)であった。ナースィルッディーンは20年もの間、スルターンの座にあったが、その治世のほとんどを摂政ギヤースッディーン・バルバン(Ghiyāth al-Dīn Balban)によって牛耳られていたと言われる。

フィリシュタによれば、トルキスタン出身のバルバンはモンゴル軍の中央アジアの侵入時に捕えられ、商人に売られ、バグダッドへ連れて行かれた。そこでまたハワージュ・ジャマールッディーン(Khwāja Jamāl al-Dīn)という人物に買われ、デリーに連れて来られた。ハワージュは、バルバンがイルトゥトミシュと同じイルバリー族の出身であることから、彼をイルトゥトミシュにプレゼントしたということである。⁽²³⁾ 奴隷として連れて来られたバルバンがイルトゥトミシュに買われるまでの経緯について、フィリシュタとはやや見解が異なるが、イブン・パトゥータは次のように書き残している。

「たまたまスルタン＝シャムス・ウッディーン・ラルミシュ(イルトゥトミシュ)は、一人の商人を遣わして、サマルカンド、ブハーラーとティルミズにおいて彼のためのマムルーク奴隷を買わせた。そこで、その商人は100人のマムルーク奴隷たちを購入したが、そのなかにバラバン(バルバン)も含まれていた。商人がマムルーク奴隷たちを連れてスルタンのもとに行くと、スルタンはバラバン以外の彼らのすべてに満足された。それは、先に説明したように、バラバンがあまりにも醜かったからである。そして、『こんな奴は要らぬ!』とスルタンが言う

と、バラバンは『おお、世界の御主人様！ あなた様がそうしたマムルークたちをお買いになられたのは、誰のためなのでしょうか』と彼に尋ねた。するとスルタンは笑いながら、『他でもない。このわし自身のために彼らを買ったのじゃよ』と答えた。そこでバラバンは、『いと高き、強大なるアッラーのためにも、是非、この私をお買いなさいまし！』と言うと、彼も『よからう』と言って、彼を受け入れ、マムルーク軍団の一人とした。しかし、彼のことは全く無視されて、水運び人夫たち[の軍団の一人]として仕事があてがわれた。⁽²⁴⁾

イブン・バトゥータが述べているように、バルバンは背が低く、風采のあがらない醜い人間であったかどうかは不明である。しかし、宮廷奴隷から身を起こし、スルターン・イルトゥトミシュの治世には有力な奴隷の一人となり、スルターン・ナーシルッディーンの治世には、彼に娘を嫁がせると摂政として権勢を振るった。最後には、ついに自らスルターンとなった成功譚の人物となれば、世間の評判に上らない筈はない。イブン・バトゥータがバルバンの容姿についての説明には、やや誇張と脚色があると言える。たとえ野心家であったとしても、情勢に明るく処世術と権謀術数に長けていなければ、60年もの間、奴隷王朝の宮廷に居続けることはできなかったであろう。その意味では、バルバンは奴隷王朝の中で、とりわけ長期にわたって常に権力の中核にいたがゆえに、権力欲の強い、醜い人間と揶揄され蔑まれていたのかもしれない。しかし、イブン・バトゥータは、バルバンの性格や成し遂げた業績について、次のように高く評価している。

「彼は、スルタンたちの中の最も優れた人物の一人であり、公明正大、温厚で、貴顕の士であった。彼の寛大な行為の一例として、次のことがあった。彼は一つの館を建設すると、それを〈安全・保護の館(ダール・アルアムン)〉と名付けた。そして、負債を負った人がそこに入ってきた時、彼がその借金を肩代わりして返済してやり、もし[人]を恐れて逃げてきた者がそこに入れば、そこを安全な場所として提供し、人殺しをして逃げ込んできた者であれば、その者に代られるべきわかって殺された近親家族に満足を与え、また法的に罰せられるべき罪を犯した者が来た場合にも同じように、その告発者に満足が与えられるようにした。彼が死んだ時、彼が埋葬されたのは、他ならぬこの館であった。私は、実際に彼の墓に参拝したことがある。」⁽²⁵⁾

イブン・バトゥータが「バルバンは公明正大、温厚で、貴顕の士であった」という言葉をそのまま信じる訳にはいかないが、少なくともスルターンになってからのバルバンは厳罰主義を徹底する一方で、慈悲と赦しを与える王としてバランスを取りながら、権力の集中化に専念していたといえる。フィリシュタは「バルバンは反乱が起こると断固たる態度で首謀者を厳罰に処し、騒乱が起こりがちなところには屯田兵の分隊を置いて、地方行政の情報集めとその監督を強化した。またトルコ人の人種の・政治的優位が強調され、ついには政権の役職からインド人ムスリムを排除するまでに至った」と述べている。⁽²⁶⁾

優れた統治者として、20年にわたり権力を掌握していたバルバンであったが、彼もまた一人の父親に過ぎなかった。長男ムハンマドを後継者にするために、ライバルや敵対者たちを一掃する一方で、辺境地帯の属領の総督に任命し統治経験を積ませ、さらに王になるための訓戒(「バルバンの訓戒20か条」)を伝えている。バルバンの訓戒は長い間、権力の中心にいてバルバン自身が学んだ教訓、つまりよい統治を行う上で、王としての心構えを説いたものである。しかし、その期待を一身

に背負っていた長男のムハンマドはモンゴル軍との戦いで落命した。バルバンは最愛の息子の死という悲痛の中で80年という生涯を閉じた。⁽²⁷⁾バルバンの墓(図21)はクトゥブ地区にほど近い、アヌブラト・マルグ(Anuvrat Marg)の道路沿いにある。墓の近くには居住地跡もあり、現在はこの地区(図20)はインドの高校生の遺跡見学コースになっている。



図20 バルバンの墓の周辺



図21 バルバンの墓

(3) ハルジー朝(1290-1320年)

① ジャラルッディーン・フィーローズ(在位1290-96年)

バルバンは臨終の床で、もう一人の息子ナースィルッディーンではなく、殉死した長子ムハンマドの息子カイ・ホスローを後継者にせよと命じたが、バルバンが亡くなるとバルバンの側近(副王)マリク・ニザームッディーン(Malik Nizām al-Dīn)はその遺志を無視して、ナースィルッディーンの子カイクバードをその後継者に据えた。わずか17歳で突然スルターンとなったカイクバード(Muizz al-Dīn Kaiqbād, 在位1287-90)は、政治力などはほとんどなく、女遊びや飲酒に溺れ放蕩生活を送ったために、国内の治安は乱れて騒乱状態に陥っていた。

同朝末期の混乱に乗じて、奴隷王朝を倒してハルジー朝を創始したのは、ハルジー族の長ジャラルッディーン・フィーローズ(Jalāl al-Dīn Firōz, 在位1290-96)であった。なぜハルジー族のような、アフガン系で非トルコ系貴族が台頭し、王朝を樹立できたのか。それはバルバンの死後、マリク・ニザームッディーンが権力を我がものにしようとして、政権中枢にいた古参のトルコ人貴族を大量に殺害したからであると言われている。⁽²⁸⁾

ハルジー族はトルコ系の血が混ざっていたが、当時のデリーの人々は彼らをトルコ人とは見なしていなかったため、ジャラルッディーンがデリー入城は歓迎されなかった。仕方なく、デリー郊外のキーロークリー(kīlōkrī)というヤムナー川河岸の地に宮廷を設けたと言われる。⁽²⁹⁾荒松雄もまた、スルターン・バルバンの時代から次のスルターン・カイクバードの治世にかけて、キーロークリーには小都市ないし居住地があったと推定している。⁽³⁰⁾現在、この地域は郊外の拡張工事や開発が進み、その所在は全く分からない。

ジャラルッディーンがスルターンになったのは70歳という高齢で、そのためか温厚で慈悲深く、人を疑わない性格であったようだ。それゆえに、結局甥で後に女婿となるアラーウッディーンに殺される羽目に陥ることになる。しかし、その原因が夫婦仲の悪さで舅と女婿の関係がもつれたことにあるとすれば笑えない話である。イブン・バトゥータはそのことについて、次のように語っている。

「スルタン＝ジャラルッディーンは、アラウ・ウッディーンを自分の娘と結婚させ、カラーの町、マーニクプールとその隣接地域の知事に任命した。(中略)、アラウ・ウッディーンの妻は夫との折り合いが悪かったので、夫の、アラウ・ウッディーンはいつも妻ことで彼の叔父(義父)であるスルタン＝ジャラルッディーンに不満訴え続けた。そして結局は、彼女のことが原因で、スルタン＝ジャラルッディーンとアラウ・ウッディーンとの関係がもつれる結果を招いた。」⁽³¹⁾

どの時代も舅と婿・姑と嫁との関係が一端こじれると元に戻るのには難しいようである。女婿でもあるアラウッディーンがまさかそれが原因で、舅で叔父でもあるスルタン・ジャラルッディーンを殺したりするとは思えないが、互いの性格や思惑の違いが不幸な結果を招いたのかもしれない。舅を殺害した顛末について、イブン・バトゥータは次のように記述している。

「アラウ・ウッディーンは、行動力があって、勇猛果敢であり、つねに勝ち運に恵まれていたので、王権への野望に燃えていた。しかし彼が手にすることの出来る財は、自らの刀剣によって獲得した異教徒たちの戦利品だけであった。たまたまある時、彼はドゥワイキール地方に軍事遠征を行ったことがあった。(中略)彼がドゥワイキール(デーヴァギリ；現在のダウラターバード)に到着すると、その土候王は彼の支配に従い、戦わずしてその町を任せた上に、莫大な贈呈品を彼に献上した。彼はカラーの町に戻ってきたが、彼の叔父(舅)には戦利品を何一つ差し出さなかった。そこで[家来の]人々は、そのことで彼の叔父の彼への敵愾心を煽った。叔父は彼を[デリーに]呼び寄せようとしたが、彼はそこに行くこと拒否した。そこで叔父のスルタン＝ジャラル・ウッディーンは、『このわしが奴のところに出掛けて、奴を連れて来よう。奴はわが子も同然じゃからな』と言った。(中略)スルタン・ジャラル・ウッディーンは、彼の甥の[アラウ・ウッディーン]のところへ達するために川を船で渡った。一方の彼の甥もまた別の船に乗って、彼を殺そうと心に決めて川を渡った。アラウ・ウッディーンは家来たちに向って、『このわしが[挨拶のために]奴と抱き合った時に、殺してしまえ!』と言った。そして二人が川の真ん中で出会って、甥[のアラウ・ウッディーン]は叔父[のスルタン・ジャラル・ウッディーン]を抱き寄せ、かねての約束通りに、彼の家来が叔父を殺害した。」⁽³²⁾

②アラウッディーン・ハルジー(在位 1296-1316年)

スルタン・ジャラルッディーンは慈悲深く、人も殺さず、人を疑うことを知らない人物であった。一方アラウッディーンは、無慈悲で、平気で人を殺し、猜疑心が強く所有欲・権力欲が強い人物となれば、勝負は最初から決まっていたようなものである。1296年、ジャラルッディーンを謀殺してスルタンとなったアラウッディーン・ハルジー(Alā' al-Dīn Khaljī)は、デリー城(ラーイ・ピタウラー城砦)を拠点としていたが、再三外敵モンゴル軍の侵入を許していたために、ラーイ・ピタウラー城砦の北北東のシーリーの地に新たなシーリー城砦(Sirī Fort)(図26)を建設した。現在、この城砦の一部は公園の中に残っているが、樹木が繁茂しており、外から見ることができない。シーリー城砦の多くの部分が消失してしまったのは、シャル・シャー(shēr shār, 在位 1538-45)がプラーナーキラーを建造するために、シーリー城砦の石材を使用したからだと言われている。

アラーウッディーンは、ヒンドゥー諸勢力を制圧するために、1307年にデカン・南インド各地にマリク・カーフルを将とする遠征軍を送った。インド亜大陸の南端までおよぶ、その野心的で強引な拡張政策ゆえに、彼は「アレクサンダー2世」と呼ばれた。アラーウッディーンの野心の一つの象徴とも言える巨大な塔が未完のまま、デリーの大モスク(クトゥブ・モスク)の北側に立っている。

アラーウッディーンの治世には、クトゥブ・モスクは、原初の約11倍の広さに拡張された。南には回廊囲壁の門として「アラーイー・ダルワーザ(‘Alāī Darwāzah)」(1305)(図23)があり、また拡張した内庭の中央には「アラーイー・ミナール(‘Alāī Minār)」(図22)の名で知られる巨大な塔が未完の状態に残っている。アラーウッディーンは、1311年に第2のクトゥブ・ミナール(「アラーイー・ミナール」)の建設に着手したが、翌年病気を患ったため、計画は中止された。この未完の巨大な塔、「アラーイー・ミナール」について、イブン・バットゥータは次のように語っている。

「さらに、スルタン=クトブ・ウッディーンは、西側の広場のところに、それより大きいミナレットを建設したいと思ったが、彼はその三分の一を建てたところで、完成を待たずして亡くなった。続いて、スルタン=ムハンマドはそれを完成させようとしたが、[占いの結果]凶兆であると出たので、それを中止した。この[未完成の]ミナレットは、規模の大きさの点で世界の不思議の一つであり、[上に登る]その通路の横幅は、象三頭が並んで登れるほどの広さである。この三分の一の[未完成の]建物は、先に述べた北側の広場にあるミナレット全体の高さと同じ。」⁽³³⁾

イブン・バットゥータの説明には明らかに事実誤認がある。「アラーイー・ミナール」を造営したのは、スルタン=クトブ・ウッディーンではなく、第3代スルターン・アラーウッディーンである。またスルターン・ムハンマドもアラーウッディーンのことであり、完成を待たずに亡くなった訳ではないと、訳注者の家島彦一は注で指摘している。⁽³⁴⁾



図22 アラーイー・ミナール



図23 アラーイー・ダルワーザ(門)



図24 アラーウッディーンのマドラサ



図25 アラーウッディーンの墓



図26 スィーリー城砦の遺構

マリク・カーフル率いる南方遠征軍は、アラーウッディーンの治世に大きな富と軍事力、そして支配権の拡大をもたらした。しかし、アラーウッディーンが亡くなると、マリク・カーフルは横暴を極め、政権内は混乱に陥った。アラーウッディーンの子クトゥブッディーン・ムバーラク・シャー(Qutb al-Dīn Mubārak Shāh Khalj, 在位1316-20)がスルターン位に就くが、若く、未熟であったため、放蕩に耽り側近政治を許す結果となった。ハルジー朝は急速に弱体し、トゥグルク朝に取って代わられた。アラーウッディーンの子クトゥブ・モスクの西南の裏手にある。クトゥブッディーン・ムバーラクの墓は不明であるが、1318年ダウラターバード(デーヴァギリ)の城砦内のジャイナ教の寺院を壊して、大モスク(図27)を建立している。現在は、ヒンドゥー教のスィーリー・バラト・マター寺院(図28)になっている。



図27 ダウラターバードの城砦内の大モスク



図28 スィーリー・バラト・マター寺院

(4) トウグルク朝(1320-1414年)

① ギャースッディーン・トゥグルク(在位 1320-25年)

トウグルク朝を創始したのは、長年アラウッディーンに仕え、モンゴル軍の侵入を阻止するために北西の辺境地帯を守り、「マリク・ガーズィー」(信仰戦士の王)と呼ばれたギャースッディーン・トゥグルク(Ghiyāth al-Dīn Tughlq, 在位 1320-25)であった。ギャースッディーンの出生について、フィリシュタは「トウグルクはギャースッディーンの子の名前であり、その父親はバルバンに仕えたトルコ系奴隷で、母親はヒンドゥーのジャート出身(ラホール近辺の農夫)であると一般に信じられていた」と述べている。⁽³⁵⁾ギャースッディーンはスルターンとしての統治時代はそう長くはなかった。その理由についてはこれから述べることにする。

イブン・バットゥータによると、長子のムハンマド・シャーは、父のスルターン・ギャースッディーンの王座を狙って、反逆を企てているという噂が絶えなかった。それは噂ではなく、事実であった。スルターン・ギャースッディーンは王都デリーに支配権を確立すると、息子ムハンマド・シャーを南インド地方の征服のために派遣した。ハンマド・シャーはこれを好機と捉え、スルターン・ギャースッディーンはすでに亡くなっているという[偽りの]情報を[軍隊の]の人々の間に流させ、直ちに自分をスルターンに認めさせようとしたが、その反乱の企ては失敗に終わった。しかし、スルターン・ギャースッディーンはムハンマド・シャーを処刑することはしなかった。のちに親の温情が仇となり、自らの死を招くことになる。

さらにイブン・バットゥータによれば、ある時、スルターン・ギャースッディーンは息子ムハンマドを自分の王国における代理の王としてデリーに残し、ベンガル遠征のため首都を不在にした。ベンガル遠征の旅から戻り、王都に近づいた時、スルターンは一つの川の畔(アフガン・プール)に仮設の宮殿(「クシュク(東屋)」)を自分のために建てるよう息子のムハンマドに命じた。そこで、ムハンマドは地上高く聳え立つ木製の檣の上にそのクシュクを建てた。しかも、わずか三日間で建設したのである。彼は、そこに[特別な]仕掛けを施した。つまり、象たちがそのある一定の方向から歩いて行くと、その宮殿が[必ず]崩れ落ちるというものであった。結局スルターンは息子ムハンマドの謀略によって、その宮殿の下敷きになって亡くなった。夜、その遺体は、彼が自らの名前に因んで名付けた(トウグルク・アーバード)と呼ばれる町の郊外にある自分で[生前]に築いた墓に運ばれ、そこに埋葬された。⁽³⁶⁾

ギャースッディーンの墓廟(図32)には棺が三体置かれている。墓の中心にスルターン・ギャー

スッディーン、その隣にスルターンが寵愛した三男のマフムード、そして一番端にスルターンの妃が眠っている。不思議なことに、その敷地内にはザファル・ハーン(Zafar Khan)の墓(「ダールル・アマーン Dar'ul-Aman(安全・保護の館)」)があり、そこに弟のザファル・ハーンと共に眠っているのがスルターン・ムハンマドであると推定される。⁽³⁷⁾



図29 ギヤースッディーンの墓、背後にはザファル・ハーンの墓

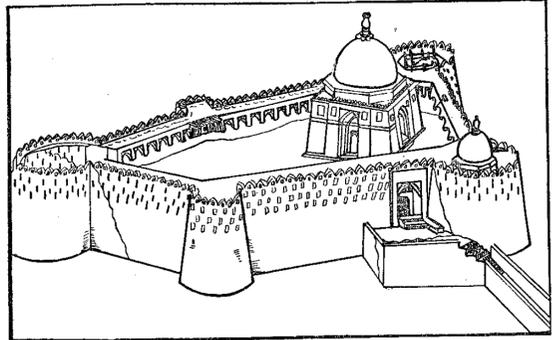


図30 ギヤースッディーンの墓建築 立体図
R. Nath, *History of Sultanate Architecture*.
1978. から

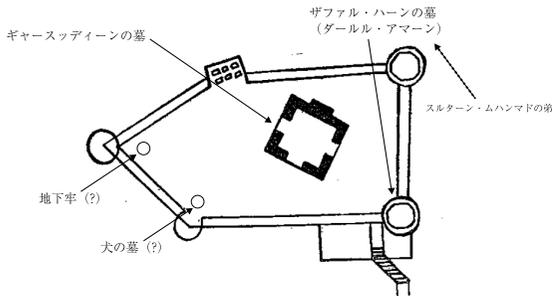


図31 ギヤースッディーンの墓建築
平面図

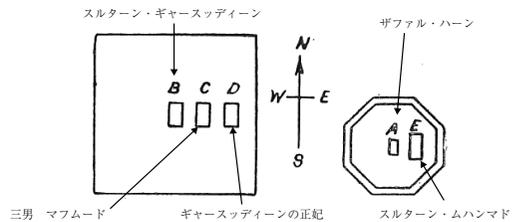


図32 棺の位置関係



図32 ギヤースッディーンの墓
左がギヤースッディーン、中央がマフムード



図33 ザファル・ハーンの墓
手前がザファル・ハーン

② ムハンマド・シャー・トゥグルク(在位1325-51年)

スルターン・ギヤースッディーンは自ら造営を命じた新都トゥグルカーバードを目前にしなが
ら、自ら築いた大城砦内に足を一步も踏み入れることなくこの世を去った。厩大な量の資材と労働
力を費やされたトゥグルカーバード大城砦は、2代目のスルターンとなったムハンマド・シャー・
トゥグルク(Muhammad Shāh Tughluq, 在位1325-51)が完成させたと言われる。イブン・バツ
トゥータは、当時のトゥグルカーバード大城砦の栄華を今に伝えている。

「町には、トゥグルクの幾つもの宝物庫と彼(スルターン・ギヤースッディーン)の宮殿があ
り、またタイルが黄金色に燦然と輝く壮大な一つの宮殿がある。太陽が昇ると、それは目もあ
やに光り輝き、じっと見つめていることが出来ないほどに照り映える。彼は、町に莫大な量
の財宝を蓄えた。伝えられるところでは、彼は貯水槽を造り」、その中に[溶かした]黄金を注
ぎ込む、一つの塊を造ろうとした。しかし、そうしたすべて[の財宝]は、彼の息子のムハンマ
ド・シャーがスルターン位に即くや、たちまちにして彼によって使われた。」⁽³⁸⁾



図34 トゥグルカーバード城砦の入口



図35 ビジャイ・マンディルからの眺望

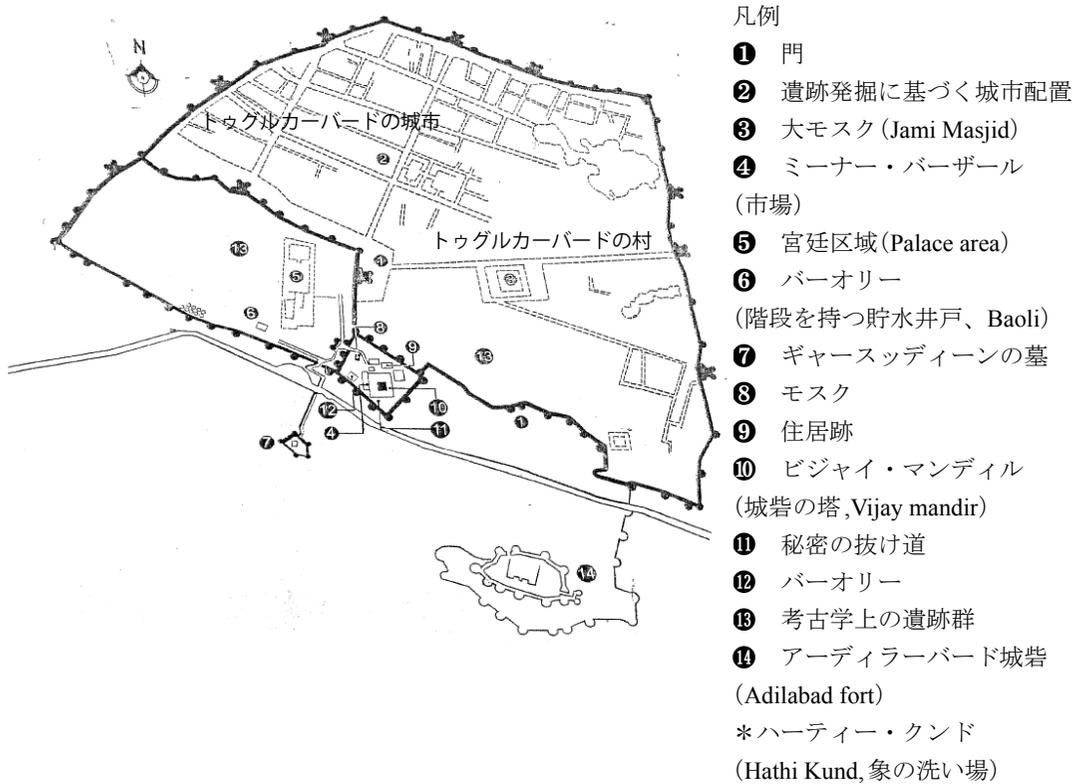


図36 配置図：トウグルカーバード城砦 (Fort of Tughuqābād)



図37 モスク



図38 バーオリ



図39 ミーナー・バーザール



図40 秘密の抜け道



図41 アーディラーバード城砦の入口



図42 アーディラーバード城砦から眺望
遠方にギヤースッディーンの墓建築

トゥグルカーバードの城砦址(図35)に登ってみると、イブン・バットウータが記述しているように、デリーを一望することができるこの壮大な宮殿はさぞ美しかったであろうと想像される。大城砦の内庭には、宮殿、大モスク、バーオリー(階段を持つ貯水井戸)、上層階級の住む町、下級階層の住む村、バーザールなど遺跡がまだ残っている。その中に、大変興味をそそられたものがあった。半径2mほどもあろうか、半分以上地中に埋まった大きなドーム状の建物(図43)で、屋根の部分は割れて、大きく口を開いた状態であった。上から中を覗いてみると、出入口のない倉庫にも見えた。近くにいた城砦の警備員に聞くと、地下牢であり、蓋の真ん中に穴の開いており、その穴から重罪人を吊るして幽閉したという。その時は半信半疑であった。ところが、イブン＝バットウータのある記述を読んで、それは紛れもなく地下牢ではないかと信じるようになった。もちろん、この大城砦の案内板にはこの地下牢についての説明は一切書かれていない。



図43 トウグルカーバード城砦内の地下牢
と思われる穴、上部は崩落

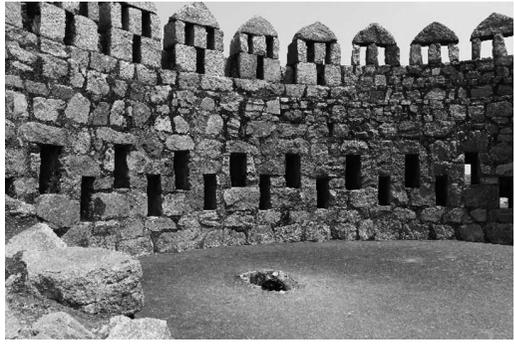


図44 ギャースッディーンの墓建築内庭
の地下牢と思われる穴

イブン・バトゥータは、ドゥワイキールの要塞について次のような説明をしている。

「上述のドゥワイキールの要塞は、他ならぬ大地の平原のなかにある岩石塊であり、岩を刻み、その頂上に一つの要塞が築かれている。そこに登るには皮革で造った梯子を使うが、夜間にその梯子は取り外される。その要塞にはムフタドゥーン、つまり〈登録された正規兵〉がその子弟たちと一緒に住んでいる。要塞には、牢獄があって、重罪犯たちはその地下牢に幽閉される。そこには猫よりも大きい太った鼠が住んでいて、猫は鼠を恐れて逃げてしまい、攻撃を防ぐことが出来ない。それは鼠が猫を襲うためであり、猫は特別な策を巡らさない限り、鼠を捕えることが出来ない。私も実際に、そこで鼠を見たが、驚き仰天するほどであった。」⁽³⁹⁾

ここで触れているドゥワイキールの要塞はカーリユールの要塞で、イブン・バトゥータは混同して記憶していたと訳注には説明されている。またイブン・バトゥータは、アフガン人のハッターブ王から聞いた話として、次のような興味深い話を残している。

「かつて一度、彼はこの要塞にある地下牢の一つ、通称〈鼠牢〉と呼ばれる牢に幽閉された。彼曰く『夜、鼠たちは私の回りに集まって来て、私を食べようとするのです。そこで私は全身の力を振り絞って戦いました。その後、私は夢の中で、ある人が私に向かって“信仰ただ一すじ”の章(『コーラン』第112章)を十万編唱えよ！しからば神は汝に喜びを与えん』と言っているのを見たのです。そこで、私はそれを唱え続けました。そして完全にそれを唱え終わるや、私は[捕囚の身から]解放されたのです。』」⁽⁴⁰⁾

イブン・バトゥータがカーリユールの要塞をドゥワイキールの要塞と混同して記憶していたとしても、むしろ当時のデリー・スルターン朝の要塞には地下牢があることが一般的であったのではないか。そう考えると、トウグルカーバード城砦やそれに隣接するギャースッディーンの墓廟の内庭(図44)にも、地下牢があったとしても不思議なことではない。もちろん、この墓の案内板にも地下牢の説明書きはない。トウグルカーバード城砦の警備員によると、トウグルカーバード城砦内の地下牢には重罪人が上の穴から吊るされた状態で降ろされたという。確かに、地下牢に続く地下

通路はない。一方、ギヤースッディーンの墓の警備員によると、ギヤースッディーンの墓建築の内庭にある地下牢には重罪人ではない人々が幽閉されており、上の穴から水や食事を降ろしたのだと言う。確かに、地下通路が幾つか存在していた。一つは地下牢に、真ん中はギヤースッディーンの地下の墓に、そして最後の地下通路はザファル・ハーンの地下の墓に通じているようだ。

●第2の首都、ダウラターバード建設

不思議なことであるが、スルターン・ムハンマドはデリーのトゥグルカーバード大城砦を短期間で放棄し、デカン北西部に位置する旧デーオギリの地に、第2の首都[ダウラターバード(Daulatābād, 富の町の意)](1327-34)を建設しようとし、そこに首都デリーの支配層、富裕者たち、学識者、大商人など都市の上層社会の人々の多くは強制的に移住させられたのである。凡人には考えられない大胆な計画は、彼の性格に拠るものかもしれない。イブン・バトゥータは、スルターン・ムハンマドの性格について次のように説明している。

「この王は、人に恵み与えることを誰よりも好まれ、[時にまた他人の]血を流すことを最もお好みになっていた。従って、彼の門前からは、金品を恵まれた乞食たち[の列]が絶えず、時にまた、生ける命を絶たれた者たち[の死体]が絶えなかった。彼に対する人々の数ある世評として、寛大で勇敢であるかと思えば、また極悪人たちの持つ残酷さと凶暴さが評判となった。」⁽⁴¹⁾

つまり、イブン・バトゥータが言うように、スルターン・ムハンマドは「天才と狂人」の性格を併せ持った人物であったのかもしれない。しかし、強制移住させるにはそれなりの理由があった筈である。その理由について、イブン・バトゥータは次のように述べている。その当時、イブン・バトゥータはスルターン・ムハンマドから現地のカディー(法官)に任じられていた。

「スルタンに対して敵愾心を燃やすべき最も重大なものの一つは、彼がデリーの住民を町から強制的に立ち退かせたことである。その理由は、以下の通りである。デリーの住民はしばしば、スルタンを侮辱し誹謗する内容を含む幾つもの紙片を書いて封印し、その表に『世界の御主人様の頭にかけて、これは彼(スルタン)以外は読むべからず!』と書いて、夜間の謁見の間に投げ込み、その文書の内容を見つけたスルタンは、デリーを破壊することを決意した。」⁽⁴²⁾

もちろん、一時の感情に囚われて、デリーから直線でも1500キロメートル以上離れたダウラターバードへ住民を強制移住させて新都を建設するなど、とても正気の沙汰とは思えない。荒松雄は、亜大陸全般の地理的条件と、モンゴルをはじめとする西北方からの外敵の脅威という当時の政治的、社会的条件を考慮すれば、デカン北西部に位置する旧デーオギリの地は、スルターン・ムハンマドにとっては様々な意味で恰好の拠点であったのかもしれないが、その背景にはむしろ首都デリーにおける経済状況の逼迫、社会秩序の混乱があったと指摘している。さらに水利(水不足)や耐熱(暑さ)といった自然条件もその理由に加えている。とりわけ自然条件を挙げる理由は、第1の首都トゥグルカーバードが多目的水利計画をもとに建設されていたという事実が存在しているからである。⁽⁴³⁾

確かに、当時のトゥグルク朝を取り巻く政治的・社会的状況や自然環境など様々な理由が考えら

れるが、インド亜大陸の征服という野望のために南インドの拠点として第2の首都を建設したということも考えられる。デカンのヤーダヴァ王朝の都デーヴァギリ(後のタウラターバー)が、1296年にハルジー朝の「第2のアレクサンダー」と呼ばれたアラウッディーンによって占領され、そこで彼は莫大な金銀財宝を手に入れたと言われる都であった。そのことについては、すでにスルターン・ムハンマドも耳にしていたと思われる。その上、スルターン・ムハンマドは以前にこの地にアミールとして配属されたことがあり、南インドを征服する上でデーヴァギリの重要性を十分認識していたと考えられる。スルターン・ムハンマドの性格から推察すると、金銀財宝の獲得の目的というよりもむしろ、インド亜大陸の征服という野望に燃えていたのかもしれない。

トゥグルカーバードを放棄し、第2の首都ダウラターバードを建設した理由として、当時のトゥグルク朝を取り巻く政治的・社会的状況や自然環境、インド亜大陸征服への野望などを挙げてきた。こうした理由とは異なる見解もある。ムハンマドはチシュティー教団(イスラーム神秘主義教団)の聖者信仰が強く、とくにデリーのニザームッディーン・アウリヤー(Nizām al Dīn Auliyaḥ, 1243/4-1325)を精神的拠り所にしていて、シャイフ・ニザームッディーンは導師ムーヌッディーン(Mu‘īn al-Dīn Chishtī, 1142?-1236)の後継者のなかで最有力候補であったが、1325年に没するとデリーに聖者がいなくなり、ムハンマドは精神的支えを失った。またシャイフ・ニザームッディーンの後継者となったナスィールッディーン・チラーゲ・ディフリー(Nasīr al-Dīn Chirāgh-e Dihlī, 1356年没)をムハンマドはないがしろにしたために、トゥグルカーバードは放棄されたというものである。⁽⁴⁴⁾確かに、この見解は、部分的には当たっていると言える。イブン・バットウータは、ムハンマドとシャイフ・ニザームッディーンとの精神的結びつきの深さについて、次のように記述している。

「さてデリーの町には、聖者ニザーム・ウッディーン・アルバザーウニーがおり、スルタン [=トゥグルク]の子息ムハンマド・シャーは、この聖者のもとに足繁く通い、聖者の弟子たちをも深く尊崇し、聖者を通して[神に対する]祈願(ドウアー)を求め続けた。ところで聖者は、[時々]神秘的な神がかり状態に襲われることがあった。(中略)そして聖者がそうした状態になり、弟子たちが知らせると、ムハンマドは聖者のいる部屋に入った。聖者はムハンマドを見るや、『われらは、その者に王国を与えん!』と言った。スルタン [=トゥグルク]が[ベンガル遠征のため首都を]不在にしている時に、この聖者が亡くなったので、スルタンの息子ムハンマドは聖者の棺を肩に載せて運んだ。」⁽⁴⁵⁾

ムハンマドにとってスーフィー聖者シャイフ・ニザームッディーンは、自分の祈願(支配への野望)を叶えてくれる、そうした聖者の霊力を強く信じていたという意味では精神的支えであったかもしれない。それはあくまでもムハンマドの祈願が叶う限りにおいてである。荒松雄は、スルターン・ムハンマドが、デリーの住民に対してデカンの第2の首都ダウラターバードへの移住を強制したとき、デリー在住の宗教者の多くも、その方針に従うことが求められた。しかし、シャイフ・ナスィールッディーンは、この勧奨に従わなかったため、トゥグルク支配層から白眼視され、その立場がきわめて困難なものとなったのではないかと推察している。⁽⁴⁶⁾つまり、スルターン・ムハンマドがシャイフ・ナスィールッディーンをないがしろにしたのではなく、スルターン・ムハンマドの意向に従わなかったため、シャイフ・ナスィールッディーンは冷淡に扱われ軽視される結果になったというのが事実に近いのではないかとと思われる。⁽⁴⁷⁾

●新都ダウラターバード

イブン・バットゥータは、1342年にウジャイン(ウッジャイン)を経てダウラターバードを訪れている。ダウラターバードについて、その頃の町の規模や商工業がデリーに匹敵する賑わいであったことを次のように述べている。

「さらにウジャインの町を出て、ダウラタ・アーバードの町に向かった。そこは、[第二の首都として、]町の重要性が高いという点から、またその都市計画の壮大さという点からも、首都デリーに匹敵する並外れて重要な町。町は三つの区画に分かれており、その一つはダウラタ・アーバードであり、そこはスルタンと彼の諸軍が居住する特別区である。また、第二区は、〈カタカ〉と呼ばれる。第三区は町の城塞[のある部分]であり、その堅固さは無類で他に匹敵するものがなく、〈ドゥワイキール〉と呼ばれる。」⁽⁴⁸⁾

イブン・バットゥータによれば、ダウラターバードの町は三つの区画に分かれており、第一区はスルタンと彼の諸軍が居住する特別区で、第二区は町を取り囲む第二城塞で、〈カタカ〉と呼ばれている。第三区は町の城塞[のある部分]である。図45の地図上で見ると、第一区は①カーラーコット(Kalākot)という城塞に取り囲まれているスルタンと彼の諸軍が居住する特別区で、第二区は②マハーコット(Mahakot)の城塞に取り囲まれている町の区域で、第三区は③アンベールコット(Amberkot)の城塞に取り囲まれている古い町の区域であることが推察される。イブン・バットゥータの以下の記述は、おそらく第二区のマハーコット城塞の中にある町の市場の様子であると思われる。

「ダウラタ・アーバードの町には、歌手と歌姫たちの市場があつて、〈タラブ・アーバードの市場〉と呼ばれているが、それは、数ある市場のなかで最も華麗にして最大規模のものである。その市場には、多数の店舗があつて、店ごとにその店の主人の屋敷に通じる扉がある。他にも別の一つの扉が付いている。[店にある]幾つかの部屋は、絨毯を敷き詰めて飾られ、部屋の中央部に一種の大きなハンモックのようなものがあつて、そこに歌姫が座ったり、寝そべったりしている。彼女は種々の宝石で着飾り、侍女たちがハンモックを左右に揺らしている。

市場の中央には、布を敷き詰め、金色に飾った一つの壮麗な御堂があつて、毎木曜日、午後の礼拝の後、楽師の団長(アミール)がその御堂内に座る。楽団長の前には、侍従の者たちや奴隷たちが控えている。歌姫たちの一座がそれぞれの座ごとに現れ、彼女たちは団長の前で日没の時まで、歌ったり舞ったりした後、引き上げて行く。

その市場には、礼拝のための幾つものモスクがあつて、礼拝の先導者たち(イマーム)はラマダーン月の間中、モスク中で夜の祈り(タラーウィーフ)を続ける。インドにおける異教徒の君主のある者は、この市場を通り過ぎる時、その御堂のところで馬を下りる。すると、歌姫たちが彼の前に出て歌うのが習わしである。また、イスラム教徒のスルタンの一人も同じように行うことを慣行としている。」⁽⁴⁹⁾

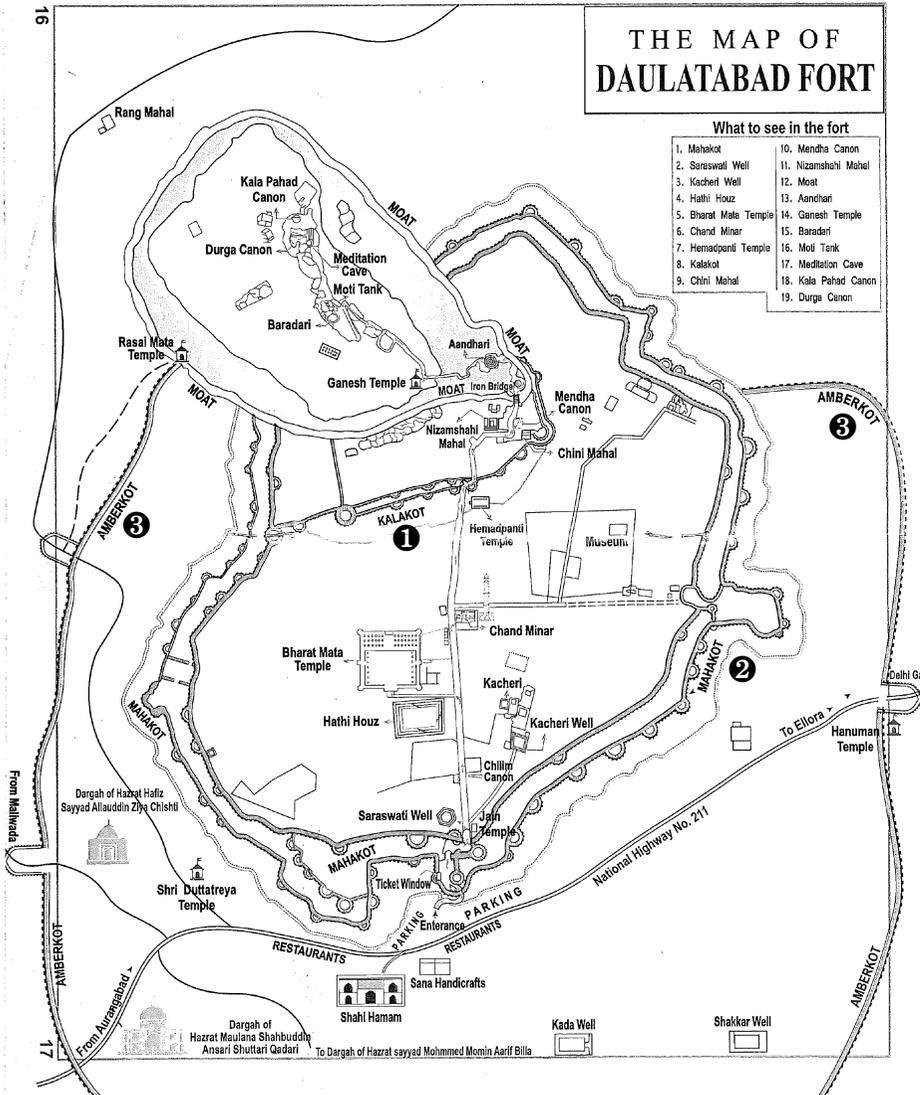


図45 ダウラターバード城砦の地図

Pictorial Tourist Guide, Daulatabad, Samarth Udyog (2012) から。



図46 ③アンベールコットの城塞



図47 ②マハーコットの第1の門



図48 マハーコットの第2の門



図49 左に大モスクと右にチャンド・ミナール



図50 バーラト・マター寺院(大モスク)



図51 ①カーラーコットの正面門



図52 カーラーコットの第2の門

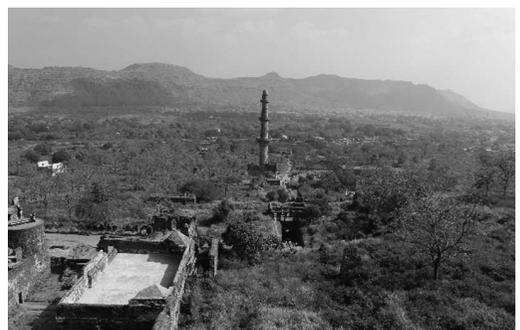


図53 ダウラターバードの遠景

●デリーの新都ジャハーンパナー

南インドの拠点として第2の首都を建設した新都ダウラターバードの建設は、ムハンマドがスルターンに即位した2年目の1327年に開始された。首都第移転のために莫大な国費を使い、デリーの住民に移住を強制したため、彼の政策に対して強い不満と反発を招き、各地で反乱が起こった。その結果、この強制移住の政策は2年目の1329年に突然中止された。結局、スルターン・ムハンマドは、1330年代の後半にこの第二の首都ダウラターバードを放棄し、デリーへ帰還することになる。その一方で、デリーの旧都トゥグルカーバードは荒廃が進んでいたようである。強制移住させられた後の町の様子とその後再びデリーに戻ってきた時の町の様子をイブン・バットゥータは、次のように記述している。

「町の住民は家財道具と商品を残したまま、すべてが移動した。そして、町は、すっかり潰れ落ちて廃墟と化した。ある信頼出来る人が私に語ったところによると、スルタンは夜間に宮殿の屋上に登って、火もなく、煙もなく、灯もないデリーを眺めて、『ああ、これでやっと、わしの気分も落ち着き、せいせいしたわい！』と述懐したそうである。その後、スルタンは諸地方の住民に布告を出して、再びデリーに人が住みつくように移住させた。そこで、彼らはそれぞれの故郷を離れたが、その空間的な広さと総体量の大きさの故に、デリーは[依然として以前のよう]賑やかさを取り戻すことが出来なかった。[それもその筈、当時、]そこは世界の中でも最も規模雄大な都市であったからである。われわれがそこに入った時に見たものといえば、まさにそうした状況の時であり、町はがらんとし、人の住む僅かな地区を除いて、そこには何もなかった。」⁽⁵⁰⁾

強制移住政策による第2の首都ダウラターバード建設は結果的に失敗に終わったが、それにも懲りずスルターン・ムハンマドは再びデリーで新都の造営に着手した。その行動力に誰もが驚かされるが、専制君主であればこそその荒業と言えよう。スルターン・ムハンマドは1330年代後半にデリーに帰還すると、4番目となる首都「ジャハーンパナー *Jahānpanāh* (世界の栄光)」の造営事業に着手したのである。現在でも、その一部の城砦址や建造物は残っているが、その全容は明らかになっていない。

現在、その全容をみることはできないが、ニューデリー南部、旧市街とスィーリーとの間に位置する新都ジャハーンパナーのほぼ中央に、スルターン・ムハンマドの新たな宮廷址と思われる「ビジャイ・マンディル *Bijay Mandel*」を中心とする遺跡群がある。「ビジャイ・マンディル」は、19世紀中葉には「バーディー・マンズィル *Bādī Manzil*」とも呼ばれていたらしい。新都ジャハーンパナーの宮殿について、イブン・バットゥータは次のように記述している。

「さて、われわれは首都デリーに入ると、早速、スルタンの御膝下を目ざした。そして、われわれは第一の門、次に第二の門、そして第三の門と順に入り、第三の門のところで、数人のナキーブたちが控えているのを見た。なお彼らについての説明は、先に行ったとおりである。われわれが彼らのもとに着くと、早速、ナキーブの長(ナキーブ・アンヌカバーウ)は、われわれを荘厳で広々とした謁見の間に案内した。見ると、そこには宰相ハワージュ・ジャハーンがおられ、われわれを待ち受けていた。(中略)われわれが第三の門から入った時、われわれの前には〈ハザール・ウストゥーン〉—その意味は〈千本の柱〉のことで、その場所でスルタンは一

般拝謁を行う一と呼ばれ大広間が現れた。その時、宰相は、頭が床すれすれになるまで低く拝礼した。そこで、われわれの方も跪いたまま、指を床につけた姿勢で拝礼をした。われわれがスルタンの玉座の方向にお辞儀をすると、われわれの同行者全員[同じように]お辞儀をした。われわれが敬礼[の儀式]を終わるや、ナキーブたちは高らかな声で『神の御名において(ビスミッラー)！』と唱えた。そして、われわれは退出した。⁽⁵¹⁾

イブン・バトゥータの説明では、スルタンの宮殿は(ダール・サラール)と呼ばれ、内部の謁見の間に至るまでに三つの門があって、それぞれの門の前には監視と連絡を任務する役人、すなわちナキーブたちが控えており、また喇叭、トランペット、スルナーヤの楽士たちが座していた。アミールもしくは重要な人物が来た時、彼らはそれらの楽器を打ち鳴らし、合奏の合間に「某(なにがし)様の御参内！某(なにがし)様の御参内！」と言い、第二と第三の門も同様に執り行われていたと言うことだ。さらにイブン・バトゥータは、「第三の門は(ハザール・ウストゥーン)と呼ばれてとてつもなく広々とした空間の謁見室につながっている。その意味は、[ペルシア語で]〈千本の柱〉のこと、つまり、それは彩色を施した木製の[千本の]柱であって、精巧を極めた彫りのある木造の屋根を支えている。一般の人々は、その下に座り、スルタンが一般の謁見のために座られたのも、他ならぬこの謁見室なのである。」と説明している。⁽⁵²⁾

問題は、新都ジャハーンパナーのほぼ中央にある「ビジャイ・マンディル(Bijay Mandel)」を中心とする遺跡群と、そのすぐ南方60mの地点にある「ベীগムプーリー・マスジッド(Begāmpūrī Masjid)」との関連性である。つまり、「ベীগムプーリー・マスジッド」はスルターン・ムハンマドが建てたものか、それとも次のスルターン・フィーローズが建てたものなのかということである。そもそも現存している「ビジャイ・マンディル」とはどのような建造物なのか。イブン・バトゥータはそのことには一切触れていない。しかし、訳注には、「ハザール・ウストゥーンの内部のスルタンによる接見の場をバディーウ・マンズィル(Bādi‘ Manzil)と呼んだ」と注釈が加えられている。⁽⁵³⁾

「バディーウ・マンズィル」とは「ビジャイ・マンディル」のことであり、「ハザール・ウストゥーン」(千柱の間)の中央の接見の場が「ビジャイ・マンディル」であると推察される。つまり、第三の門を入り、広々とした「ハザール・ウストゥーン」(謁見の間)の中央に堅固な城砦の塔のような建造物が「ビジャイ・マンディル」(図54)ということではないのか。

「ベীগムプーリー・マスジッド」がどの時代に建てられたのかについては諸説がある。フィーローズ・シャーのワズィール(宰相)、ハーネ・ジャハーン・テランガーニー(Khān-i-Jahān Telangānī)によって建てられたという説が有力である。ハーネ・ジャハーン・テランガーニーは、スルターン・ムハンマドの治世から仕えていた、南インドのテランガーナー地方出身のヒンドゥーからの改宗ムスリムであった。次のスルターン・フィーローズ・シャー(在位1351-88年)のワズィール(宰相)となった人物である。しかし、荒松雄氏は近接する両者の位置関係(図55)からみて、ベীগムプーリー・マスジッドもスルターン・ムハンマドの時代(1343年頃)に建立されたと推定している。同様に、R. ナースもまた、ベীগムプーリー・マスジッドは、1354年にスルターン・ムハンマドが建造したものだと述べている。その根拠として、ベীগムプーリー・マスジッド(モスク)の建築様式がフィーローズ・シャーのモスクやテランガーニーのモスクとはかなり特徴が異なる点を挙げている。正方形に囲まれたベীগムプーリー・マスジッドの西側には、礼拝室に入る門の両端に太い先塔がびったりと張り付いており、こうした様式は14世紀のデリーのモスクのどこにも見られないものである。⁽⁵⁴⁾ 結論を言えば、ベীগムプーリー・マスジッド(図57)の二本

の太い先塔の門構えが、テランガーニーのカーラーン・マスジッド(図60)やカーリー・マスジッド(図61)に、フィーローズ・シャーのキルキー・マスジッド(図62)に影響を与えたのではないかということである。いずれにせよ、ここに新しいインド独自のマスジッド(モスク)様式が生まれたことは間違いない。



図54 ビジャイ・マンディル



図55 ビジャイ・マンデルから見える
ベーガムプーリー・マスジッド



図56 ベーガムプーリー・マスジッドの東門



図57 ベーガムプーリー・マスジッドの西側

③ フィーローズ・シャー・トゥグルク(在位 1351-88年)

第2代スルターンのムハンマド・シャー・トゥグルクは、インド南端部近くまで征服し、デリー・スルターン朝時代の最大版図を実現したが、全インドの統一強化を目指す諸政策も失敗に終わり、結局デカンなど周辺地方を失った。第3代スルターンの座に就いたのは、ムハンマドの甥のフィーローズ・シャー・トゥグルク(Firōz Shāh Tughluq)であった。フィーローズ・シャーは幼少のころからスルターン・ギヤースッディーンに仕え、スルターン・ムハンマドの治世では、大部隊の指揮官として重責を務めるなど、厚い信頼を得ていた。スルターン・ムハンマドはフィーローズ・シャーを自分の後継者に指名し、死の床に際しても、有力な貴族たちに彼をスルターンに推すよう頼んでいたといわれる。⁽⁵⁵⁾ギヤースッディーン・トゥグルクの娘が自分の息子を王座に就けようと強硬に主張したが、スルターン・ムハンマドの遺言どおり、フィーローズ・シャー・トゥグルクが後継者に選ばれた。ところが、フィーローズ・シャー自身はスルターンになるよりもむしろ、メッカへの巡礼を望んでいたと言われる。⁽⁵⁶⁾

こうしたスルターン・フィーローズの性格が、トゥグルク朝の治世にどのように影響したのかについて、外征と内政との関連で論じる必要があるが、紙数の関係上、デリーで行った建造物、とくに首都建設とモスク造営の関連に焦点を当てて論じることとする。第3代スルターンになったフィーローズ・シャー・トゥグルクは南方への軍事遠征を避け、北インドの各地に都市やモスクを造り、大灌漑事業などを推進などして繁栄をもたらした。とりわけ、首都デリーにおけるモスク造営において歴史的に大きな役割を果たした。スルターン・フィーローズは、新たな広域首都ともいふべきフィーローザーバードの建設に着手するとともに、デリーの諸地域に規模壮大なジャーマ・マスジッドを次々に造営した。

新首都フィーローザーバードの宮廷区域の中心に「フィーローズ・シャー・コートラ(Firōz Shāh Kōtla)」がある。また彼はフィーローザーバードの首都圏内に「八つのジャーマ・マスジッド」を造営したと荒松雄は推定している。現在、残っていると思われるのは、オールド・デリーのトルコマン門近くの「カーラン・マスジッド(Kālān Masjid)」(1387年)、ニザームディーン近くの「カーリー・マスジッド(Kālī Masjid)」(1370-72年)、そして「クーシャケ・シカールのジャーマ・マスジッド」、つまり「キルキー・マスジッド(Khirkī Masjid)」(1370年代)と比定される。⁽⁵⁷⁾

荒松雄によると、「キルキー・マスジッド」は「クーシュケ・シカール(狩猟宮)のジャーマ・マスジッド」、つまり当時のスルターンや貴族・廷臣たちが最大の娯楽としていた狩猟の場所、いわばお狩り場に建てられた離宮ともいふべき建造物だったと考えられる。⁽⁵⁸⁾また、ほかの書物によると、キルキー・マスジッドとカーラン・マスジッドは関連性があるようである。ニザームディーンにあるカーラン・マスジッドは、1370-71年にスルターン・フィーローズ・シャーのワズィール(宰相)であったハーネ・ジャハーン・テランガーニーによって建てられ、その後、カーラン・マスジッドを改良した形でキルキー・マスジッドが1375年頃にハーネ・ジャハーン・テランガーニー(あるいは彼の美しい妹によって建てられたという説もある)によって建てられたと説明されている。⁽⁵⁹⁾

スルターン・フィーローズ・シャーの治世には、壮大なジャーマ・マスジッドのほかに、中小規模のマスジッドが多数造営されている。その一つが、ハウズ・ハース(Hauz Khās)のモスクである。ハウズ・ハースには、1352年にフィーローズ・カレッジとマドラサ(Firoz's college or madrasa)(図64)が建てられ、1355年には集会所(Convocaiion-Hall of Hauz Khas)(図65)が、1360年にフィーローズ・シャー・トゥグルクの墓(図63)が、また1360年にはジャーミ・マスジッドも建てられている。いずれにせよ、フィーローザーバードの首都圏がいかに広域であったかを物語っている。

フィーローズ・シャーの治世は、スルターン・ムハンマドの強権政治を改め、軍事遠征も極力北インドに限定し、様々な制度改革を実施し、大規模な灌漑施設の建設、都市、道路などの公共インフラや多数のモスクを建設し、経済的繁栄をもたらした。しかし、スルターン・フィーローズ・シャーの晩年になると、激しい権力闘争が起これ、その結果内部分裂と衰退が進み、ついに1398年ティムール軍の侵入を受けて、トゥグルク朝は事実上滅亡したのである。



図58 フィーローズ・シャー・コートラ



図59 図58の上から見た宮廷址



図60 カーラーン・マスジッド



図61 カーリー・マスジッド



図62 キルキー・マスジッド



図63 フィーローズ・シャー・トゥグルクの墓



図64 フィーローズ・カレッジとマドラサ



図65 集会所

おわりに

イブン・バットゥータは、1334年から1342年までの約8年間インドのデリーに滞在した。そしてスルターン・ムハンマド(在位1325-51年)のもとで法官職を務めた。それはムハンマド・シャー・トゥグルクがスルターンの座に就いてから10年後のことであった。イブン・バットゥータは、奴隷王朝(1206-1290年)、ハルジー朝(1290-1320年)、トゥグルク朝(1320-1342年)の約136年間のデリー・スルターン朝の歴史的な出来事を『大旅行記』の中に残している。イブン・バットゥータがインドに滞在する以前の歴史に関する情報は、主としてスルターン・ムハンマドの大法官を務めたシャイフ・カマル・ウッディーンとシャイフ・ルクン・ウッディーンの2人を通じて得られたものだとされる。しかし、イブン・バットゥータの伝えるデリーのスルターンたちの歴史的事実には、訳注者の家島彦一が指摘しているように、しばしば混乱や誤り、そして誇張や脚色などが多々見られる。おそらくそれはいずれかの史書から得た知識や様々な伝聞をもとに、2人のシャイフが主にイブン・バットゥータに情報を提供したものといえる。⁽⁶⁰⁾

デリー・スルターン朝の遺跡群にはそれぞれ独特な建築様式を持つものも少なくない。しかし同時に、中央アジア地域からの影響を全く受けていない建造物も少ないのも事実である。例えば、クトゥブ・ミナールはガズナ朝やゴール朝のミナレットを模倣して造られているが、大きさや形、壁面の模様や材料などにより独自の建造物となっている。こうした独自の建造物が生み出された背景には、おそらくスルターン朝の置かれた政治的・社会的状況、スルターンの出自や生い立ち、イスラームの伝統や中央アジアのムスリム諸族の慣習や文化、そしてその時代の流行や土着のヒンドゥー・ジャイナ教の文化や技術など、いくつもの要素が複雑に影響し合ったことが考えられる。さらに当時のデリー・スルターン朝の支配権力とスーフィー教団の宗教権威との関係は、その時代の建造物に直接的な影響は与えていないが、デリー・スルターン朝の物語において重要な役割を果たしたことは間違いない。⁽⁶¹⁾

奴隷王朝がデリーに支配権を確立し、ハルジー朝を経て、トゥグルク朝時代になり、領土支配がインド全域に広がり、政治的にも安定してくると、ホラーサーン、中央アジア、イラク、イラン、エジプト、そして遠くはマグリブ地方からも多数の人々が「インドの富」を求めて流れ込んできた。またモンゴルの覇権をめぐる絶え間ない戦争や、民族間の対立と虐殺などから逃れてくる者も多かった。とくにイランや中央アジア(トルコ系・アフガン系)から地方君主や指導的家系に属する人々、正統イスラームの学者や知識人、スーフィー諸派の聖者や野心的な武将たち、芸術家や職人たちが、次々にインドに移住・定着し、デリー・スルターン朝の建造物に新しい文化的・宗教的要素を吹き込んだといえる。

「インドの富」をめぐるインドへの侵入は、デリー・スルターン朝時代の間においても、それ以降においても長い間続くことになる。1220年前後には、チンギス・ハーン軍がインドに侵入、それ以降も繰り返しモンゴル軍の侵入を受けた。1398年には、中央アジアのティムール(ティムール朝創始者)はインド遠征を計画し、自ら大軍を率いてインドに侵入し、デリーを陥落させ、わずかの滞在の間、略奪の限りを尽くして帰還した。その結果、トゥグルク朝の崩壊を招いた。こうした「インドの富」の言説は、後にヨーロッパにも広がり、ヴァスコ・ダ・ガマ(1498)がインド航路を発見するきっかけにもなったとも言われる。バーブルもまた、1519年以降5回に及んでインドに侵入し、インドにムガル帝国を創始した。ムガル帝国時代には、1738年イラン・アフシャール朝のナーディール・シャーがインド遠征を敢行し、デリーに入城すると、略奪と殺戮を行い、莫大な戦利

品をもって帰還した。その後も、ヨーロッパ人のインド植民地支配へと続くことになる。

中央アジアのムスリム諸族や他の異民族の侵入は、その理由が「インドの富」であれ、イスラームの擁護であれ、覇権の拡大であれ、西北インドの破壊と殺戮、そして略奪に他ならなかったといえる。ガズナ朝のマフムードは、パンジャーブから北インド、中央インドにかけて、ヤムナ河畔の有名なヒンドゥー教の聖地やヒンドゥー寺院(ソームナート寺院)を徹底的に破壊し、殺戮し、多量のインドの富をガズナへ持ち帰った。ゴール朝のムハンマド軍もまた、インド仏教の最後の拠点ヴィクラシラー僧院などを破壊し、多数の仏僧を殺害し、インドの富を奪い去ったのである。ティムールやバーブルもまた同様である。イスラームの名の下に行われたヒンドゥー教徒やジャイナ教徒へのムスリムの残虐で野蛮な行為は、西北インドの人々にイスラームへの恐怖と不信を植え付ける不幸な結果となった。こうした意味から、デリー・スルターン朝の遺跡は多数のヒンドゥー教徒にとって歴史の負の遺産と見ることもできるが、例えばそれに関連する全てのインドの遺跡を破壊したとしても、歴史の事実が消える訳ではない。むしろ歴史の事実を直視できなくなる。デリー・スルターン朝の遺跡の全てを負の遺産として否定するよりも、その遺跡に刻まれた歴史の多様性、宗教や文化の混交にこそ耳を傾ける必要があるのではないかと思う。

注

- (1) Mahomed Kasim Ferishta (translated by John Briggs), *History of the Rise of the Mahomedan power in India*, Cambridge University Press, London, Vol.1, 1829, pp.67-77.
- (2) *Ibid.*, pp.169.
- (3) *Ibid.*, pp.175-180.
- (4) R.Nath, *History of Sultanate Architecture*, Abhinav Publications New delhi, 1978, pp.9-4.
- (5) イブン・バットゥータ、イブン・ジュザイイ編(家島彦一訳注)『大旅行記4巻』東洋文庫、平凡社、2000年、346頁。
- (6) R.Nath, *ibid.*, pp.12-13.
- (7) Y.D.Sharma, *Delhi And its Neighbourhood*, Archaeological Survey of India, New Delhi, 2001, pp.55-56.
- (8) ロミラ=ターブル(辛島昇・小西正捷・山崎元一共訳)『インド史2』みすず書房、1972年、117-118頁。
- (9) イブン・バットゥータ、前掲書、346頁。
- (10) N.Nath, *ibid.*, p.15. ムイースッディーン・チシュティーンは、ムイースッディーン・スイジュズィーン(Mu‘īn al-Dīn Sijzi)ともハワージュ・ムイースッディーン(Khwājah Mu‘īn al-Dīn)とも呼ばれた。
- (11) *Ibid.*, p.21.
- (12) イブン・バットゥータ、前掲書、346-347頁。
- (13) John L.Esposito (ed.), *The oxford of Islam*, Oxford University Press, 1999, p.228.
- (14) Mahomed Kasim Ferishta, *ibid.*, p.190.
- (15) *Ibid.*, pp.205-206.
- (16) イブン・バットゥータ、前掲書、358-359頁。
- (17) Mahomed Kasim Ferishta, *ibid.*, p.218.

- (18) *Ibid.*, pp.213-215.
- (19) イブン・バットウータ、前掲書、360頁。
- (20) 前掲書、360 - 61頁。
- (21) 前掲書、361 - 362頁。
- (22) Mahomed Kasim Ferishta, *ibid.*, pp.218-222.
- (23) *Ibid.*, pp.248.
- (24) イブン・バットウータ、前掲書、364 - 365頁。
- (25) 前掲書、364頁。
- (26) Mahomed Kasim Ferishta, *ibid.*, pp.256-261.
- (27) *Ibid.*, pp.263-271.
- (28) Francis Robinson, *The Mughal emperors and the Islamic dynasties of India, Iran Central Asia*, Thames & Hudson, 2007, p.86.
- (29) *Ibid.*, p.87.
- (30) 荒松雄『中世インドの権力と宗教』岩波書店、1989年、56 - 57頁。
- (31) イブン・バットウータ、前掲書、374頁。
- (32) 前掲書、374 - 375頁。
- (33) 前掲書、347 - 348頁。
- (34) 前掲書、393頁。
- (35) Mahomed Kasim Ferishta, *ibid.*, pp.401-402.
- (36) イブン・バットウータ、『大旅行記5』、27 - 28頁。
- (37) R.Nath, *ibid.*, pp.52-58.
- (38) イブン・バットウータ、前掲書、28頁。ムハンマド・シャー・トゥグルクはムハンマド・ビン・トゥグルク (Muḥammad bin Tughluq) と呼ばれた。
- (39) イブン・バットウータ、『大旅行記6』、46 - 47頁。地下牢 (jubb/ajab.jubub) : ジュップは〈穴〉、〈深い井戸〉、〈危険な海域〉、〈牢獄〉のこと。ここでは〈岩を彫った地下牢〉の意味。訳注(88頁)の(178)より。
- (40) 前掲書、47頁。
- (41) イブン・バットウータ、『大旅行記5』、48 - 49頁。
- (42) 前掲書、126 - 127頁。
- (43) 荒松雄、前掲書、61 - 63頁。
- (44) John L.Esposito (ed.), *ibid.*, pp.403-404.
- (45) イブン・バットウータ、『大旅行記5』、22 - 25頁。
- (46) 荒松雄、前掲書、199 - 200頁。
- (47) K. A. Nizami, *Early Indo-Muslim Mystics and their Attitude towards the State, Islamic Culture*, January, 1950, pp. 62-65.
- (48) イブン・バットウータ、『大旅行記6』、46頁。マハーコット城砦内に建っているチャンド・ミナール(図49)は、15世紀半ばにここを攻略したバフマニー朝のアラーウッディーン・アフマド2世が造営した征服記念塔である。
- (49) 前掲書、48 - 49頁。
- (50) イブン・バットウータ、『大旅行記5』、127頁。

- (51) 前掲書、300 - 301 頁。
- (52) イブン・バットゥータ、『大旅行記5』、51 - 53 頁、134 頁の注(17)を参照。ハザール・ウストゥーンが存在していたことはすでに立証されている。
- (53) 前掲書、132 - 133 頁
- (54) R. Nath, *ibid.*, pp. 56-57.
- (55) Mahomed Kasim Ferishta, *ibid.*, p.444.
- (56) Francis Robinson, *ibid.*, p.98.
- (57) 荒松雄、前掲書、133 - 136 頁。
- (58) 前掲書、138 頁。
- (59) R.Nath, *ibid.*, pp.69-73.
- (60) イブン・バットゥータ、『大旅行記4』、388 頁の注(1)を参照。
- (61) 荒松雄、前掲書、211 - 212 頁。
- (62) マフムードがガズナに持ち帰ったものの中に「ソームナートの門扉」があった。1842年の第1次イギリス・アフガン戦争のさなか、イギリス軍がガズナのマフムードの墓廟を訪れた際に、800年前にマフムードから持ち去られた「ソームナートの門扉」を発見し、それを強奪し、インドに持ち帰った。それは現在、アーグラー城内に置かれている。近藤信彰「八〇〇年後の『復讐』—西南アジアにおける『ソームナートの門扉』の歴史—」永原陽子編『生まれる歴史、創られる歴』、2011年、31-53 頁。